

文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業
オープン・リサーチ・センター整備事業

国際シンポジウム報告書

人びとの暮らしと文化遺産

— 中国・韓国・日本の対話 —

2007年7月14日

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究中心



国際シンポジウム

人々の暮らしと文化遺産 — 中国・韓国・日本の対話 —

日時：2007年7月14日（土） 13:30～17:00

会場：関西大学千里山キャンパス尚文館 AV 大ホール

パネリスト

- 【中国】 楊志剛氏（復旦大学文物与博物館学系教授）
吳恩培氏（蘇州市職業大学呉文化研究所所長）
陳来生氏（蘇州科技学院管理学院教授）
- 【韓国】 金錦詳氏（(財)新羅文化遺産調査団専任研究員）
金美貞氏（韓国文化遺産観光コーディネーター）
- 【日本】 奈良俊哉氏（近江八幡市文化政策部文化振興課文化財専門員）
コーディネーター：高橋隆博（なにわ・大阪文化遺産学研究センター長）

※同時通訳がつきます

定員 200名（無料・先着順）

お申し込み方法

下記のお問合せ先にメール
または電話・FAX・往復葉書
にてお申し込みください。

締切：2007年7月4日（当日消印有効）

お問い合わせ先：関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 関西大学博物館内

TEL. 06 (6368) 0095・1313（直通）（土日祝日はご遠慮ください）

FAX. 06 (6368) 0092

E-mail:naniwa@jm.kansai-u.ac.jp

関西から

文化力

HOW TO CULTURE

人々の暮らしと文化遺産

—中国・韓国・日本の対話—

このたび、なにわ・大阪文化遺産学研究センターでは、初の試みとして国際シンポジウムを開催いたします。

本シンポジウムでは、人々の生活の中で「文化遺産」がどのように存在しているのかを、中国・韓国・日本それぞれの立場から考えていきます。

中国からは、急成長する都市上海と「水の都」蘇州、韓国からは古都慶州、日本からは重要文化的景観の第一号に指定された近江八幡が取り上げられ、現状と課題、展望が語り合われます。

三か国のパネリストによる報告とディスカッションによって今後の文化遺産のあり方、保護・活用について議論が深まることを期待します。

パネリスト紹介

楊 志剛 (ヤン シゴウ)

復旦大学文物与博物館学系教授。主に中国思想文化史や礼儀制度の研究にたずさわる。現在は中国の文化遺産の研究を通して教育やその活用・保護につとめている。

著書に『中国禮儀制度研究』『凝固の皇権』などがある。

吳 恩培 (ゴ オンバイ)

蘇州市職業大学呉文化研究所所長。長年にわたり明代の住居“明居”の調査と保存に関わる。

著書に『巨商沈万三』『百年覺渡(上・下)』『二十世紀蘇州の故事』『文化の争奪』『勾吳文化の現代闡釈』などがある。

陳 来生 (チン ライセイ)

蘇州科技学院管理学院教授。蘇州市政府文化旅游案内専門家。専門は中国伝統文学・伝統文化。歴史文化資源や文化名城の持続発展、世界遺産の保護と利用につとめる。著書に『世界遺産在中国』がある。

金 鎬詳 (キム ホサン)

財団法人・新羅文化遺産調査団の専任研究員兼調査研究二課長として慶州の文化財保護につとめる。文学博士。専門は、新羅古代史。奈良文化財研究所など日本での発掘・調査経験も豊富。

金 美貞 (キム ミジョン)

韓国文化遺産観光コーディネーターとして、韓国の文化遺産を日本の観光客に分かりやすく紹介し、観光という視点から日韓の文化交流を深めている。

奈良 俊哉 (なら としや)

滋賀県近江八幡市文化政策部文化振興課文化財専門員。平成18年、西の湖・長命寺川・八幡堀と周辺のヨシ地、円山・白王の集落部分を含む「近江八幡の水郷」が国の重要文化的景観の第1号に選定される過程において尽力した。

コーディネーター

高橋 隆博(たかはし たかひろ)

なにわ・大阪文化遺産学研究センター長。奈良県立美術館を経て関西大学教授となる。美術館時代にいち早く「職人尽絵」展を開き注目を浴びる。「文化遺産学」の提唱者。

関西大学へのアクセス

梅田	阪急千里線(北千里行き)	関大前		
梅田	阪急京都線	淡路	阪急千里線	関大前
JR新大阪	地下鉄御堂筋線	西中島南方/南方		
	阪急京都線	淡路	阪急千里線	関大前
大阪空港	大阪モノレール	山田	阪急千里線	関大前

*お車でのご来校はご遠慮ください。

ごあいさつ

当センターは、大阪各地域を対象として「文化遺産とは何か」ということを模索しながら、日々調査、研究を進めております。

昨年度は、センターが活動を開始してちょうど3年目を迎えました。この節目となる3年目におよび、「文化遺産」をめぐる国際間比較をする必要性を感じました。近年、ユネスコの世界遺産登録に申請するため、文化遺産が存在する地域の中には、あらゆる推進事業が展開されているところもありますが、世界遺産に登録されても登録されていなくても、「いったい誰のための文化遺産か」という問題がそこには存在しています。

そこで、大阪と歴史的に関係の深い東アジアの国から、日常的に「文化遺産」に携わっておられるパネリストをお迎えし、議論を試みようということになりました。

本シンポジウムでは、各地域の人びとの暮らしのなかで、「文化遺産」がどのように存在し、未来に向けてどのような取り組みがなされているのか等について、中国、韓国、日本それぞれの立場から考えることを目的としました。

シンポジウム「人びとの暮らしと文化遺産」は、当センター開設以来、初めての国際シンポジウムとなりました。本シンポジウム開催にあたり、中国語、韓国語の通訳をそれぞれご専門の方にお願ひし、準備段階から当日にいたるまで、多大なるご尽力を賜りました。また、当日は、夏の風雨の激しいなか、168名もの皆さまにご来場いただきました。本シンポジウムにご協力下さった皆さまに、心より厚くお礼を申し上げます。

2008年11月30日

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

センター長 高橋隆博

致 词

我们研究中心以大阪各地为对象，为了探索“文化遗产是什么”这个问题，天天在进行调查研究。

上一年度我们迎来了本中心开始活动的第三年。到了这个阶段，我们深深感到围绕“文化遗产”问题，有必要进行国际间的比较。近年来，为了向联合国教科文组织申报登记世界遗产，有些存在文化遗产的地域展开了各种推进活动，但不管是世界遗产是否能够登记，都存在着“为了谁的文化遗产？”这个问题。

因此，这次我们邀请在历史上与大阪关系密切的东亚诸国“文化遗产”的专家来研究讨论这个问题。

这次研讨会的目的是，中国、韩国、日本三者站在各自的立场来考虑：各地老百姓的生活之中，“文化遗产”的实际存在状况，以及面向未来所开展的有关活动，等等。

研讨会“老百姓的生活与文化遗产”是我们中心开设以来第一次的国际研讨会，我们请了汉语和韩语的翻译，他们从准备阶段到研讨会召开当天，给了我们许多帮助；还有，研讨会那一天，168位来宾冒着夏日的暴风雨光临会场。

在此，我们对各位的配合和支援，表示衷心地感谢。谢谢！

2008年11月30日

关西大学 浪速·大阪文化遗产学研究中心
中心代表 高 桥 隆 博

인 사 말 씀

당 센터는 오사카 각 지역을 대상으로 「문화 유산이란 무엇인가」라는 것을 모색하며 나날이 조사, 연구를 진행하고 있습니다.

저희 센터는 작년으로 활동을 시작한지 3년을 맞이하게 되었습니다. 이러한 시기를 계기로 「문화유산」을 둘러싼 국제간의 비교의 필요성을 느꼈습니다. 근래 유네스코 세계유산등록신청을 위해 문화유산이 존재하는 지역 안에서는 온갖 추진사업이 전개되고 있는 곳도 있습니다만, 세계유산 등록여부를 떠나 「대체 누구를 위한 문화유산인가」라는 문제가 그곳에는 존재하고 있습니다.

그리하여 오사카와 역사적으로 관계가 깊은 동아시아국으로부터, 일상적으로 「문화유산」에 종사하고 계신 페널리스트 여러분들을 맞이하여 논의를 시도하게 되었습니다.

본심포지엄에서는 각 지역의 사람들의 생활 안에서 「문화유산」이 어떻게 존재하고, 미래를 향해 어떠한 활동이 진행되고 있는가 등에 대해, 중국, 한국, 일본 각각의 입장에서 생각하는 것을 목적으로 하였습니다.

심포지엄 「사람들의 생활과 문화유산」은 당 센터 개설이래의 첫 국제 심포지엄이었습니다. 본 심포지엄 개최에 있어 중국어, 한국어의 통역을 각각 전문가에게 부탁하고 준비 단계에서 당일까지 크나큰 도움을 받았습니다. 또, 당일은 여름 풍우에도 불구하고 168명의 많은 분들께서 참석해 주셨습니다.

본 심포지엄에 협력해 주신 여러분들께 진심으로 감사의 말씀을 드립니다.

2008년 11월 30일

관서대학 나니와·오사카문화유산학연구센터
센터장 타카하시 타카히로

報告書について

1. 本書は2007年7月14日、関西大学尚文館にて開催した、国際シンポジウム「人びとの暮らしと文化遺産—中国・韓国・日本の対話—」の記録集である。
2. 講演録については、日本語訳のみを掲載した。パネルディスカッションについては議論の方向性を分かりやすくするため、編集担当者がまとめたものを掲載している。
3. 当日の通訳について、中国語⇔日本語は、林雅清氏、石暁軍氏に、韓国語⇔日本語は、成美那氏にご協力いただいた。
4. 当日配布資料について、本書では各報告者の使用する言語（中国語、韓国語、日本語）で掲載した。
5. 本書の編集は森本幾子（P.D.）、千葉太郎（R.A.）が担当した。なお、本書の編集にあたり、テープおこしした文章を編集担当者が校正した。
6. シンポジウムの開催および本書の作成にあたり、下記の方がたにご協力いただいた。記して感謝の意を表したい。

陳 波氏（関西大学非常勤講師）

高 明均氏（関西大学外国語教育研究機構教授）

林 雅清氏（関西大学大学院文学研究科中国文学専攻博士課程後期課程）

成 美那氏（司法通訳人）

石 暁軍氏（姫路獨協大学教授）

藤原 学氏（吹田市立博物館研究員）

プログラム

- 13:30～13:40 あいさつ
高橋隆博（なにわ・大阪文化遺産学研究センター長）
- 13:40～14:00 民众与遗产：以上海为重点的若干考察
人々と文化遺産：上海を中心とした調査より
楊志剛（復旦大学文物与博物館学系教授）
通訳：林雅清（関西大学大学院文学研究科中国文学専攻博士後期課程）
- 14:00～14:20 蘇州文化與列入世界文化遺産名錄的蘇州園林
蘇州文化と世界文化遺産に登録された蘇州園林
吳恩培（蘇州市職業大学吳文化研究所所長）
通訳：石曉軍（姫路獨協大学教授）
- 14:20～14:40 传统文化保护与旅游开发—以江南水乡古镇为例
伝統文化の保護と観光開発—江南水郷古鎮を例に
陳来生（蘇州科技学院管理学院教授）
通訳：石曉軍
- 14:40～15:00 休憩
- 15:00～15:20 역사 도시 경주의 문화재보존 성과와 문제점 그리고 사라지는 근대유산
文化遺産の現状と課題—韓国・慶州—
金鎬詳（(財)新羅文化遺産調査団専任研究員）
通訳：成美娜（司法通訳人）
- 15:20～15:40 관광으로 본 한국의 문화유산
観光からみた韓国の文化遺産
金美貞（韓国文化遺産観光コーディネーター）
- 15:40～16:00 日本における事例 重要文化的景観選定第1号「近江八幡の水郷」
奈良俊哉（近江八幡市文化政策部文化振興課文化財専門員）
- 16:10～17:00 パネルディスカッション
- 17:00 閉会のあいさつ
藪田貫（なにわ・大阪文化遺産学研究センター総括プロジェクトリーダー）

目次

ごあいさつ	高橋隆博（なにわ・大阪文化遺産学研究センター長）	… 3
報告書について		… 6
プログラム		… 7
目次		… 8
報告・中国		… 9
民众与遗产：以上海为重点的若干考察		… 10
（人びとと文化遺産：上海を中心とした調査より）		
楊志剛（復旦大学文物与博物館学系教授）		
通訳：林雅清（関西大学大学院文学研究科中国文学専攻博士後期課程）		
蘇州文化與列入世界文化遺産名錄的蘇州園林		… 14
（蘇州文化と世界文化遺産に登録された蘇州園林）		
吳恩培（蘇州市職業大学吳文化研究所所長）		
通訳：石曉軍（姫路獨協大学教授）		
传统文化保护与旅游开发—以江南水乡古镇为例		… 19
（伝統文化の保護と観光開発—江南水郷古鎮を例に）		
陳来生（蘇州科技学院管理学院教授）		
通訳：石曉軍		
報告・韓国		… 23
역사 도시 경주의 문화재보존 성과와 문제점 그리고 사라지는 근대유산		… 24
（文化遺産の現状と課題—韓国・慶州—）		
金鎬詳（（財）新羅文化遺産調査団専任研究員）		
通訳：成美娜（司法通訳人）		
관광으로 본 한국의 문화유산		… 27
（観光からみた韓国の文化遺産）		
金美貞（韓国文化遺産観光コーディネーター）		
報告・日本		… 35
日本における事例 重要文化的景観選定第1号「近江八幡の水郷」		… 36
奈良俊哉（近江八幡市文化政策部文化振興課文化財専門員）		
パネルディスカッション		… 45
報告レジュメ集		… 49

報告・中国

人びとと文化遺産：上海を中心とした調査より

楊志剛（復旦大学文物与博物館学系教授）

通訳：林雅清（関西大学大学院文学研究科

中国文学専攻博士後期課程）

尊敬する河田学長、尊敬する先生方、皆さま、こんにちは。本日はこのような光栄な講演会に参加させていただきありがとうございます。「人びとの暮らしと文化遺産」というテーマで、中国、韓国、日本のそれぞれの学者がともに討論をすることは、大変意義のある研究成果を上げることができると思います。私の本日の発表内容は、「上海を中心とした人びとと文化遺産の関係」について、皆様にご紹介いたします。

人びとと文化遺産の関係は、現代の文化遺産という概念を具体的にあらわす鍵であり、現代社会の文明のレベルをはかる重要な指標でもあります。現代の「文化遺産」という概念の萌芽は、近代公共博物館の誕生と時を同じくしています。これは、人びとの暮らしと文化遺産の保護をつなげるという視点において、大変重要であると考えます。



楊志剛氏

上海市における博物館開放の歴史

これらは、私が以前からずっと考えていた以下の2点の考えに基づく研究結果です。1つ目は、博物館の一般開放の問題に通じる問題であり、現代における文化遺産概念の基礎をなすものです。2つ目は、ここ数年来、「文化遺産」という言葉が全世界において急速に広まっており、このことは、ユネスコの世界遺産リストの推進と関係いたしますが、掘り下げてみれば、これはグローバル化の流れの中における現代社会の基本理念の再構築と表裏一体の問題であるということがわかります。

さて、中国における博物館発祥の地は上海です。1868年、フランスのイエズス会宣教師、ピエール・ウッド（写真1）が上海にやってきて、上海南西部にある徐家匯（上海ひいては全中国における西洋文化流入の中心地）に博物館を建てました。英文名を Museum of Natural History といいます。1883年、この博物館が完成し、「徐家匯博物館」と命名されました。毎日午後一般開放され、入館は無料で、入館券もありませんでした。1929年には震旦大学に併合され、呂班路（現在



写真1：ピエール・ウッド

の重慶南路)に場所を移し、「震旦博物館」と名前を改めました。これが「徐家匯博物館」の全景であります(写真2)。同じく震旦博物館の展示室の1つです。標本室です(写真3)。自然文化遺産、文物、文化財の展示を行っております。ただし、この震旦博物館は、一般開放はされませんでした。

1874年、イギリス王立アジア協会の北中国支部によって上海博物院(王立アジア協会博物館)が建てられました。これは、中国で2番目の博物館になります。1886年にこの博物館が移転されたことにより、「円明園路」が「博物院路(バンド付近にある現在の虎丘路)」と改名されたことから考えても、その影響は多大なものであったと言えます。

このような背景のもと、1895年には、中国維新派が設立した上海強学会によって、博物館の開設案が提出され、その主要4項目の1つに挙げられました。当時の中国の思想家である梁啓超は、1896年に発表した論文で博物館開設を主張しました(「論学会」『時務報』、1896年11月5日版)。

さて、これまで上海における博物館の出現を振り返ったのは、同時に近代以降の「人びとと文化遺産」という視点の始まりを明らかにするためです。1857年の秋、上海文理学会(2年後に王立アジア協会北中国支部と改名)が設立された際、『北華捷報』という紙上で、「当会は大衆に便宜を与える文化資源となるであろう」と評価されました。また、1878年には、協会自身が、「上海博物院は公共サービスのためにある」と明言しています。研究結果によりますと、1890年代には、当博物館は連日一般向けに開放され「月曜と火曜の午後には中国人を対象に開放」されていたとあります(王毅『皇家亞洲文会北中国支会研究』1上海書店出版社、2005年)。

しかし、残念ながら、さまざまな歴史的要因によって、上海における公共博物館の発展は決して順調ではなく、1949年まででも全部で5、6か所しか建設されませんでした。先ほどの2か所の博物館のほか、警察博物館(1935年創建、上海警察局所属)、上海市博物館(1937年1月開館)、中華医学会医史博物館(1938年創建)、そして松江県教育図書博物館(1915年創建、1937年戦火によって倒壊)の6か所です。これらは、一般開放の状況などは期待できませんでした。

「コミュニティー博物館」という概念

前世紀の50年代及び80年代から90年代にかけて、上海の博物館は急速な発展を遂げ、今日に至って、さらに大きな発展の時期を迎えています。1997年に出版された『上海文物博物館誌』によると、当時、すなわち90年代に上海には博物館や記念館が34か所存在し、ほかに展示室や展示館が15か所あったといえます。そのほか、2002年、上海市文物管理委員会が認可した博物館、記念館は

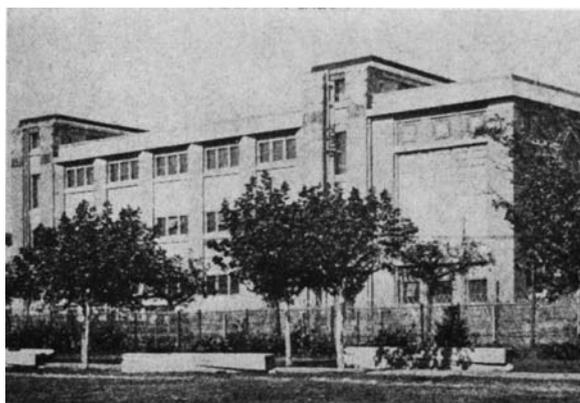


写真2：徐家匯博物館

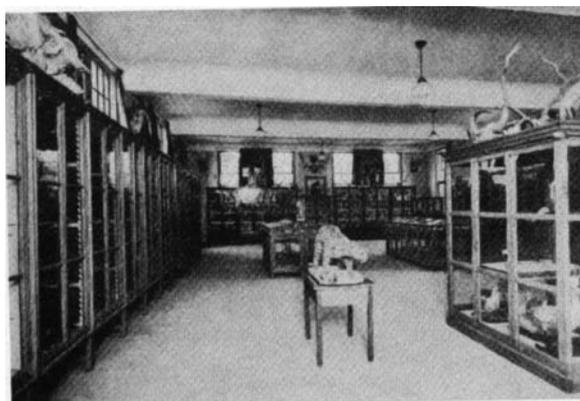


写真3：震旦博物館標本室

64か所に達します。さらに数字を挙げるなら、2007年6月までには、上海の博物館、記念館の総数は106か所に上ります。そして、2010年には、上海の博物館、記念館は150か所に達すると予想されています。

このような公共博物館の増加は、必然的に人びとが文化遺産に親しみ味わう機会が増えるということの意味しています。しかし、「人びとと文化遺産」の関係を数字によってのみ簡単に示すことはできません。例えば、もし博物館が人びとを惹きつけることができなくなり、だれも入らなくなれば、あるいは博物館が人びとの生活と全く関係のないものになってしまうと、博物館の価値や文化遺産が人びとに受け入れられているとはとても言えないと思います。

ところで、最近、「コミュニティー博物館」という概念が広まってきており、博物館サービスに対して、その方法論を指導するという役割を担いつつあります。一部の博物館では、自発的にそのイメージを改め、対策を打ち出し、人びとが博物館に足を向けるように努力しています。それと同時に、博物館が地域社会や学校に参入できるよう手を尽くしています。社会全体の発展レベルの上昇によって、ここ数年、人々の文化遺産に対する興味が次第に増しており、それに伴って高度な精神的要求も提示されています。

今年の5月、高橋歴史文化陳列館を訪れた際に、私は「人々と文化遺産」というテーマについてはっきりとした解釈を得ることができました。高橋は、上海の浦東地区の北の端に位置します。江南水郷地帯の古い村であり、1129年に村がつくられ、歴史も古く、文化財が集まっており、人材も多く輩出しました。高橋歴史文化陳列館の展示物は、95パーセントが実物で、多く民間から寄せられたものです。その中にある展示物は、現地の生産生活や風土、民情を反映しており、現地の人びとの地域に対するアイデンティティとプライドを感じさせるものです。当陳列館は、その建物自体にも特徴があり、河沿いに建つ民国期のレンガ造りと木造の二階建てであり、中洋折衷住宅で「仰賢堂」と呼ばれています。

移転と補修を経た後、展示室として使われるようになった当博物館は、今年の5月18日の「国際博物館の日」に正式に一般開放されました。これが内部の展示室の展示物です（写真4）。これらの展示物からは、高橋鎮という村の歴史、文化が見てとれます。

誰のための文化遺産保護か

最後に、上海では、既に優良歴史的建築物および文化財保護団体などに関する発表がなされています。その数は632か所、2138棟に上り、合わせると480㎡を超えます。そのほか100余りの全国主要文化財保護団体と地方文化財保護団体があり、40か所の地方歴史文化財的建築物があります。

近年、「国際博物館の日」と「中国文化遺産の日（毎年6月の第2土曜）」には、これらの一部の文化財、文化的建築物が関係機関の規定に従って一般開放されています。例えば、2004年の国際博物館の日には、23か所の優良歴史的文化的建築物が一日無料で一般開放され、見学者は4万6000人に達しました。また2005年5月下旬の連休には、40か所に上る古い建築物が2



写真4：高橋歴史文化陳列館展示1

日間、無料開放され、見学者は17万7000人にも達しました。一部の施設では、来場者が多すぎて困るという現象も起こり、今年の文化遺産の日の無料開放期間中には、とりわけこのような現象が目立ちました。これは、人びとが文化遺産に向かい近付いてきているという熱意の表れであり、また、人びとと文化遺産の間の客観的な距離を示していると言えるでしょう。

優良歴史的建築物には、すべてこのような表札・標識があります(写真5)。これは、私が今年の5月25日に高橋鎮を訪れた際に撮った写真です。陳列館の写真です(写真6)。優良歴史的建築物の保護には、人びと皆に責任があると訴えています。これは高橋鎮という村が指定した文化財保護団体の1つです。古い歴史的建築物の中に、まだ人が住んでいます。

最後に、4月5日、私は上海市の文物保護団体「四明公聴」を訪れた際に、そこに保険会社があるのですが、その警備員に阻まれ、詳細に調査することができませんでした。これは、その「四明公聴」の門跡です(写真7)。この門は10mほど左に移転され、隣に保険会社のビルが建ちました。通りからは、門の表面を見ることができるんですが、裏面は見ることはできません。裏面を見たいと思えば、この保険会社の中に入って裏を見るしかありません。ですので、私は中に入って裏面を見ようと思いましたが、この保険会社の門を入ろうとしたときに、警備員にとめられて、入ることができませんでした。これには多くの問題をはらんでいると思われます。つまり、「誰のための文化遺産か」、「誰のための文化遺産保護か」という問題です。

上海は、中国でも比較的早い時期から、「人びとと文化遺産」の関係に関心を抱いてきた地域です。今日に至るまでに、成功した面もありますが、やはりまだ不十分な面もたくさん残っています。もし、中国の文化遺産事業の発展に対してある種の文明的な観点によって観察したならば、「人びとと文化

遺産」の関係は、文明の程度を判断する大切な物指しにもなるでしょう。このことをもって、意識的に中国の文化遺産事業の現在そして未来における発展を期待することは、それらの事業が健全であり、継続可能であるということを確認なものにするために大いに役立つことでしょう。ありがとうございました。これで私の発表を終わります。(拍手)



写真5：優良歴史的建築物の標識



写真6：高橋歴史文化陳列館展示2



写真7：四明公聴

蘇州文化と世界文化遺産に登録された蘇州園林

吴恩培（蘇州市職業大学呉文化研究所所長）

通訳：石曉軍（姫路獨協大学教授）

尊敬する関西大学の学長先生、尊敬するなにわ・大阪文化遺産学研究センター長先生、こんにちは。今回は、ここで話をさせていただくチャンスをいただきまして、本当にありがとうございます。今日の発表テーマは「蘇州文化と世界文化遺産に登録された蘇州の庭園」です。



吴恩培氏

蘇州古典園林の世界文化遺産登録

まず、蘇州古典園林、つまり庭園の世界文化遺産への申請について紹介しましょう。

1997年12月4日にイタリアのナポリで開催された世界遺産委員会第21回大会において、「拙政園」、「留園」、「網師園」、「環秀山荘」が典型的な蘇州の古典庭園の例証として正式に世界遺産リストに登録されました。今の「網師園」、「留園」、「拙政園」の写真です（写真1～3）。

また、2000年11月30日に、オーストラリアのケアンズで開催された世界遺産委員会第24回大会において、「滄浪亭」、「獅子林」、「藝圃」、「藕園」と「退思園」が蘇州古典庭園の拡大項目として世界遺産リストに登録されました。これは退思園の写真です（写真4）。

世界遺産委員会は、蘇州の古典庭園の世界遺産登録申請を審議した際、蘇州の古典庭園について次のように高い評価をしました。「歴史的に著名な都市である蘇州の園林ほど中国の古典庭園に関する設計の理想を表現するものは、ほかのどこにも見られない。それは、限られた狭い空間の中に、美しい人工的な自然景観をつくった上、自然景観に新しい生命を与えている。蘇州の庭園



写真1：網師園



写真2：留園



写真3：拙政園



写真4：退思園

は、中国の古典庭園の設計思想を見事に実現した模範として認められた。これらの11世紀から19世紀にかけて建てられた庭園は、心を込めて、高度に洗練された設計で、大自然から栄養を取り入れ、さらにその自然景観を超えるという、中国文化の奥深さやムードを反映している。」

蘇州古典園林の歴史的変遷

次に、春秋時代から晋の時代までについての蘇州古典庭園の歴史的な変遷について触れたいと思います。

(春秋時代－呉の王家園林の出現－)

まず、春秋時代における呉の国の王家園林について触れたいと思います。これについては、主に「夏駕湖」と「姑蘇台」を例として紹介します。関係の資料として、唐の陸廣微の『呉地記』という本の中に、夏駕湖に関する次のような記事が見られます。「夏駕湖は、呉の国の建国者である壽夢が真夏に車に乗って納涼していた場所である。彼は、湖を切り開いて、園林を設けて、動物を飼育した…」夏駕湖という池の具体的な場所についてはいろいろな説がありますが、これは時間の関係で省略させていただきます。

次は、姑蘇台について触れてみたいと思います。姑蘇台については、同じく『呉地記』の記載によると、「闔廬11年、姑蘇山において台を建て、山の名前にちなんで名づけられた。その場所は、蘇州の南西方向の35里のところにある。その後、闔廬の息子である夫差が、再び高さを増し、飾りをつけて建て直した。その後、越が呉を侵攻して、姑蘇台を焼き払った。」とあります。その後の姑蘇台の状況についてははっきりわからないところもありますが、ほかにもいろいろ関係の記事があり、私のレジュメにも書いてあります。姑蘇台の具体的な場所についても幾つかの説があります。『史記』の著者司馬遷の話によると、少なくとも漢の時代は、姑蘇台はまだ見られるということです。

(東漢時代－蘇州「辻家園」の記載－)

次に、東漢時代における蘇州の庭園について触れてみたいと思います。清朝に編さんされた『呉門表隱』という書物がありまして、その第1巻の中に、私的園林に関する記載が見られます。それは「辻家園」です。この部分の関係資料は私のレジュメの中にもありますので、ご参照ください。

(魏晉時代－蘇州私家園林の定型－)

次は、魏晉南北朝時代における蘇州の私家園林、庭園の定着について触れてみたいと思います。このことについては、『晋書王献之伝』の中に関係の記事が見られます。その内容は、「有名な書家の王献之が、かつて蘇州にある辟疆園というところに入った。その際に、王献之が辟疆園の造営の決定について厳しく批判したので、園主である顧辟疆という人物が、これに大変怒って、王献之が園を追い出された」というものです。これは、中国の歴史上において有名な話ですが、特に王献之に関しては有名な話です。この話に東晋時代の蘇州における私家園林、「辟疆園」という名前が登場するのは、まさに興味深い話であると思います。辟疆園については、その後の資料の中にも数箇所見られますが、今日は時間の関係で省略させていただきます。

(宋元時代－蘇州園林の成熟－)

次に、宋、元の時代における蘇州園林の状況について触れてみたいと思います。これも、今日は主に「滄浪亭」、「獅子林」を例として紹介していきたいと思います。まず、「滄浪亭」は、資料によると、「北宋時代の有名な詩人である蘇舜欽という人物が、当時中央の戦争に巻き込まれ、都の東京（現在の河南）開封から蘇州に左遷されてしまった。彼は蘇州に来て間もなく土地を購入して滄浪亭をつくった。」とあります。今見られる写真が、南宋時代の滄浪亭の所有者の関係の韓世忠という人物です(写真5)。



写真5：韓世忠（1088-1151年）

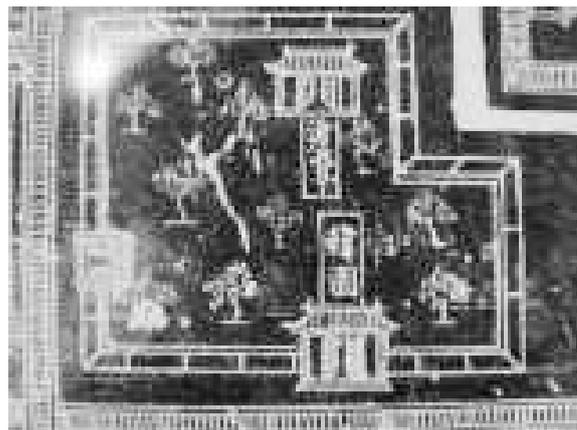


写真6：滄浪亭

また、蘇州でも有名な石碑である「平江図碑」の中にも「滄浪亭」という名前も見られます(写真6)。次は、「獅子林」に関して紹介したいと思います。「獅子林」は、元の至正2年（1342年）につくられました。『蘇州歴代園林録』という書物によると、天如という禅師の門人で惟という人物が、朱徳潤、朝鮮の倪元鎮、徐幼文などを招き、協議した上で完成されたということです。

(明清時代－蘇州園林の興盛－)

次は、明、清時代における蘇州園林の興盛について触れてみたいと思います。まず取り上げたいものは、有名な「拙政園」です。「拙政園」は、明の時代につくられた庭園ですが、その敷地については、さらに前の時代にさかのぼります。資料によると、まず、三国時代においては郁林太守である陸績、その後は東晋時代の戴顓、唐の時代になると、有名な詩人陸龜蒙の邸宅でした。宋の時代になると、胡稷言という人物が同じ場所で「五柳堂」をつくりました。元の時代には、大弘寺というお寺となり

ました。今、見られているのは拙政園の写真です(写真7)。

次は、「留園」について触れてみたいと思います。「留園」は、明の嘉靖年間(1522年～1566年)、太僕寺の少卿である徐泰時という人物によって造営されました。この徐氏は、中央、朝廷庭園、いろんな土木工事を担当していました。その後、故郷の蘇州に戻って、この庭園をつくりました。清朝の嘉慶年間になりますと、劉恕という人物が、40歳になる前に病気をして辞職して、故郷の蘇州



写真7：拙政園

に戻りました。彼は、徐氏の庭園を購入し改築と拡張を行い、「寒碧山荘」と改名しました。清末になると、布政使である盛康がこの庭園を購入し、さらに拡張を行いました。この留園の名前について、まだいろいろな説がありますが、一番有力な説として、「以前の園主の苗字は劉といい、戦難に遭い閶門周辺にたったひとつこの庭園だけが残留してしまったので、盛氏は、劉氏の庭園「劉園」の音をとって「留園」に改名した。」というものです。

次に、「網師園」について簡単に紹介したいと思います。「網師園」はもともと宋の時代の邸宅庭園です。南宋時代の史正志(紹興の進士、樞密院の編修を担当)が中央から辞職して、ふるさとの蘇州に戻って、ここで「萬卷堂」を建て、花畑を「魚隱」と名付けました。これは、隠居を意味します。その後は、宋の時代から清の乾隆時代までの500年間は、関係記事は全くありません。清末になると、関係の記事が見られますが、ここでは主に宋宗元という官僚が老後の生活のために、この漁隱の意をあらわすときに「網師園」と名付けたと記されています。

近代になると、「網師園」は、江蘇省の按察使である李鴻裔という人の手に渡りました。その後は「滄浪亭」の近くなので、「蘇鄰」と呼ばれるようになります。その後、1932年の上海事件が起こった後に、有名な画家の張大千兄弟も、ここに仮住まいをしていました。

では、時間の関係で、最後の問題に移りたいと思います。

世界文化遺産と私たち

世界文化遺産と私たちということですが、この問題については、蘇州は歴史文化の有名な都市として、我われに古典庭園やたくさんの名勝を残してくれましたが、世界文化遺産に対する概念や認識について言えば、蘇州と蘇州市民たちは複雑な気持ちを持っており、さまざまな変化、移り変わりを経験いたしました。

1つは、1950年代の後半には、当時の中国では何よりも経済発展が最優先という風潮があり、蘇州においても、工場建設のために小さな庭園を壊すということさえもありました。その後、文化大革命を経験し、蘇州市の文化財は相当なダメージを受けました。中国全土に起こった文化大革命の動乱から抜け出した時に、蘇州が文化を見直し始めました。

90年代以降、特に、1994年から、蘇州市が蘇州古典庭園の世界文化遺産登録への申請に着手し始めました。その時、多くの民衆は「世界遺産」という概念をまだ完全に理解していなかったものの、先祖世代が残してくれた文化をしっかりと保護しようという共通の認識を持ちました。度重なる議論を

経て、蘇州市の上層部で比較的成熟された意見がまとまりました。すなわち、最も代表的で、保護状況がよく、国際的知名度の高い古典園林に焦点を当て、優先して申請するという方針です。ここに至るまで6年かかりましたが、最終的に世界遺産への登録に成功しました。蘇州の9つの古典園林ともに、世界遺産リストに登録されるようになりました。

登録された後は、いかに景観を保護していくかという問題が新たに直面した大きな課題です。レジュメの中に書いてありますが、主に5つの方面からやらなければいけないと思います。1つは、完璧な関連法規を定めます。2番目は、関連法規に従いまして、リストに登録された9つの庭園の保全管理をより強化すること。3番目は、世界遺産リストに登録された古典園林を中心に、全面的に修復への方法を展開します。4番目は、建設するとき外部の整備を強化します。最後は、市民たちにその認識の理解を広めます。

今日は、時間の関係で、これで終わります。ありがとうございました。(拍手)

伝統文化の保護と観光開発—江南水郷古鎮を例に

陳来生(蘇州科技学院管理学院教授)

通訳：石曉軍

尊敬する皆様、こんにちは。今日は文化遺産と保護・保全のことについてお話させていただく機会をいただきまして、本当にありがとうございます。私の今日の報告のテーマは、「伝統文化の保全と観光開発」です。

中国では、悠久かつ豊富な文化遺産があり、たくさんの長い歴史を持つ遺産が存在しています。ところが今、1つの問題に直面しています。それは、景観保全の問題と開発問題とのジレンマ、板ばさみということです。数多くの歴史的な街、都市、すなわち中国で言うところの「歴史文化名勝古鎮」に対しては、歴史的な街の景観の保全と、地元の住民の生活改善のために行われる新しい開発や建設という矛盾が存在しています。

したがって、このような「歴史文化名勝古鎮」の景観の保全が当面の大きな課題となっています。

ただし、どのような方法でこれらの文化遺産を保護・保全するのか、ただ象徴的に現状を維持するのか、それとも積極的に保全の方法について研究し、市民たちに指導するのか、また、先人から伝えられてきたものとして、そのまま骨董として置いておくだけなのか、それとも文化活動をしながら、持続発展できる道を探し求めるのか。こういうような問題をたどりながら、私は今日のテーマである「伝統文化の保全と観光開発」という話を進めていきたいと思います。

中国における歴史的な古鎮

中国では、古い鎮が、たくさんあります。今の写真は安徽省の南の中の西遞古村という、世界文化遺産に指定されたところです(写真1)。今の写真は、同じく安徽省にある宏村という村ですが、同じく世界文化遺産に指定されたところです(写真2)。宏村の橋の写真です(写真3)。今の写真は、蘇州の近く、同里という退思園の写真です(写真4)。建築としては有形な文化遺産として指定されました。そこでは芝居が上演されています。この写真は、昆劇という中国で一番古い劇の1つで、無形文化遺産に指定されました(写真5)。以上、中国における古鎮の写真を通して清の古鎮の大体の様子がわかっていただけたでしょうか。



陳来生氏



写真1：西遞古村



写真 2：宏村



写真 3：宏村の橋



写真 4：退思園



写真 5：昆劇

江南水郷古鎮の研究価値について

これからの話は、主に江南地域の水郷古鎮を中心に話を進めていきたいと思えます。なぜ、この問題を取り上げるのかというと、江南地域の古鎮は、中国の鎮の中で一番代表的な水郷の鎮だからです。この江南水郷古鎮の研究価値については、いろいろな方面から考えられますが、その中で歴史的に形成してきた古鎮として、各地域の独特な歴史的な伝統や文化を備える民居、街道、建築物などが存在します。

特に江南地域の古鎮では、悠久の文化や歴史及び独特の水郷風景で、中国の多くの古鎮の中でもずば抜けています。江南の古鎮の魅力は、鎮を構成する川、つまり運河、橋、建築はもちろんのこと、江南地域という独特の地理的な環境、風土、経済、生活や人文的な要素によって形成してきた水郷文化全体にあります。

ところが、自然のおよび人為的な原因により、かつて江南地域に広く分布していた水郷古鎮は、現在一部だけが前のままの形で保存されているのみです。したがって、江南の古鎮についての研究および開発は、非常に重要な意味を持っていると言えます。

古鎮観光の必然性と合理性

江南の古鎮の観光と開発の関係について触れてみたいと思えます。文化遺産景観保護の基本的な原則は、秩序を持って合理的にそれら遺産を利用するということです。保護的な開発がなければ、開発

を持続させることはまず不可能です。したがって、合理的な開発の利用は、資金提供保障体制が良い軌道に乗る手助けとなります。つまり、財政的な支援体制を整え、同時に有効的な開発利用をすることが、現在では最大の課題であり、ひいては、文化遺産が文化の保持体として文化を伝播するという社会的機能を発揮するための手段となります。

今のところ、文化遺産開発と文化財をめぐる観光エリアの開発を同時に進行させるということは、中国を含め全世界の文化遺産開発利用の1つの一般的な形式となっています。したがって、開発利用をすること自身は何も問題がありません。一番重要なことは、いかに多角的に、しかも有効的に遺産を開発し利用するかということです。

江南の古鎮と申しますと、皆さんご存じかと思いますが、いろんな古鎮がございます。これはいずれもかけがえのない貴重な遺産です。言うまでもなく、その独特の様子と伝統文化を全面的に保全、保護しなければなりません。しかし、古鎮を保護すると同時に、住民の生活を改善し、社会経済を発展させなければなりません。古鎮の景観保全と地域の経済の発展を両立できる方法を探さなければいけないのです。

この方法の1つとして、何よりも観光産業が挙げられます。観光産業によって、古鎮の保護と観光資源の維持を兼ねることが出来ます。今までの中国の観光業の発展で証明されたように、文化遺産資源の市場化開発は、経済発展という状況のもとでのリスクを最小限に抑えられる現実的な選択であることがわかりました。

蘇州の例を取り上げると、例えば、80年代の末、先ほど触れました退思園を修復したときに、当時は人民元で80万元もの投資をしましたが、これは大変なお金です。みんな少し心が痛かったのですが、今振り返ってみますと、当時の80万元の投資は賢明な決定だと思われれます。要するに、文化遺産という公共性を持つ資源について、保護と観光開発の発展のバランスをとれる持続発展可能な道を模索しなければならないのです。

観光開発に存在する問題

次に、江南水郷古鎮の観光開発に存在している問題について触れてみたいと思います。古鎮の観光は政治、経済の新しい発展に活力を与えましたが、一部の地域で古代建築や古代街道の歴史文化価値に対する認識がとても不足しています。多くの建築が壊されまして、あるいは経済利益だけを追求して、遺産の保護や観光の開発については、文化的な遺産に深刻なダメージを与えてしまいました。

1つ目は、空洞化による古鎮の特色ある情緒の損失です。つまり、多くの古鎮が景観保全という名目の下で、もともと古鎮に住んでいた住民たちを強制的に引っ越しさせたのです。2つ目は、地域住民の保護意識が希薄であるということです。各地域の一部の古鎮の民居が老朽化したため、生活に適していないというところがあります。そのため、一部の住民が勝手に住宅を建て直し、新しい建築材料を使用した結果、景観保全に大きなマイナスの影響を与えました。3つ目は、生態環境と文化環境を無視した汚染です。主に観光客がごみを所構わず投げ捨てます。それも水郷古鎮にとって大きな破壊の原因と言えます。4つ目は、観光客の大量殺到に伴い、水郷古鎮が本来持っている、飾り気なく人情の厚いものを捨て、一部の観光客の悪い趣味に応じて品性がないものを提供しているということが見られます。つまり、観光地における商業化傾向が強まり、観光商品として加工したものを提供しているということです。5つ目は、一部の古鎮のなかで街路に面している住宅は改造され、お店となっ

ていますが、このように、多くの特色ある古鎮が産業化によって現代的な都市の中で変貌させられたということです。

観光開発と保護

水郷古鎮の観光開発と保護、景観保全は、計画的に行わなければならないと思います。その具体的な原則としてはいくつかあります。1つ目は、景観保全という前提のもとで開発を行わなければならないということ。ビジネスのことばかり考えては大変危険です。2つ目は、協調、発展という原則です。つまり、経営者、観光客、住民の3つの方面の利益を同時に確保しなければならないと思います。

次に、全体の環境維持について触れてみたいと思います。古鎮の環境は、長い目で見れば、それが発展するためには、開発と同時に全体の環境を維持しなければならないと思います。その中で、いくつかの注意すべき事柄があります。1つは、全体的な生態系の保護システムを確立すること。2つ目は、観光客の人数をコントロールして環境を保護し、快適な観光環境を維持すること。3つ目は、ひとつの地域を中心に、江南の古鎮の構成要素を全体として全面的に保護すること。また、それら管理体制をしっかりとすることです。4つ目は、観光について独特な文化的内容のブランドを確立することです。江南水郷古鎮の地域的特質は、その歴史文化の蓄積であり、ゆえに開発と保護を行う際の核心部分のキーワードとして「文化」「古鎮」「水郷」が挙げられます。5つ目は、観光開発のメリットについて、住民たちに肌で感じさせること。つまり、地域参画体制をつくり、伝統文化保護の雰囲気形成することです。6つ目は、総合的な経営能力を向上させ、文化遺産を有効に保護することです。

以上、時間の関係で、これで終わらせていただきます。本当にありがとうございました。

(拍手)

報告・韓国

文化遺産の現状と課題—韓国・慶州—

金鎬詳（（財）新羅文化遺産調査団専任研究員）

通訳：成美娜（司法通訳人）

ご紹介に預かりました金鎬詳と申します。今朝はホテルで納豆を食べました。納豆と昆布茶を初めて口にしたときには、私はあんまりおいしいとは感じませんでした。ですが、旅を重ねるにつれ、日本の伝統ある食べ物であるということから魅力を感じ、最初に味わったときの思い出して感極まりながら食べることができました。

今日は日本、中国、韓国のシンポジウムの内容すべてを理解することはできないとは思いますが、お互いに協力しながら文化遺産を保存するのであれば、輝いていた東アジアの3つの国の文化を再現できるであろうと思います。簡単に歴史都市慶州の文化財保存の成果、そして問題点を検討しながら、急激に消えつつある韓国農村の生産遺跡を紹介したいと思います。



金鎬詳氏

古都慶州の文化財保護

今ごろんになっている写真は慶州を衛星撮影した写真です（写真1）。慶州は標高30メートルの盆地をなす、韓国の代表的な歴史の町です。新羅は慶州を中心にして紀元前57年から935年までの992年という歴史を持ち、ローマ帝国を除くほかに類を見ない長い歴史を持つ国です。ソク、ボク、キムという3つの集団から輩出された56名の王によって導かれ、この中には3人の女王がいました。

新羅の首都である慶州は、中国は唐の国の長安城をモデルにして、日本の奈良のように碁盤のような360個の方形の形を持つ格子型都市構造をなしており、発掘調査により1つの方形の大きさは160平方メートルであるということがわかりました。8世紀から9世紀の全盛期において都市全体が炭でご飯を炊き、金で家屋を飾ることを禁止する法令が下されたことを見ても、どれほど華麗な都市であったのかがよくわかります。



写真1：慶州（衛星写真）

このような古代東アジアの代表都市である慶州に対し、さらに1000年が過ぎた今日の文化財保存の成果と問題点を検討すると次の通りです。写真は慶州の競馬場の予定敷地の写真です（写真2）。慶州の地域に建設が予定されていた慶州競馬場の約30万坪の敷地において、先史時代から近世に至るまでの大規模な瓦窯や須恵器窯を初めとする多様な遺跡が確認され、全

国民による慶州競馬場建設反対運動が功を奏し、史跡第430号に指定され、保存されることになりました。

また、慶州の都心を通り抜く鉄道の路線を利用して全北高速鉄道を建設する計画がなされたのですが、慶州市民を初めとする文化財機関によって、慶州市外郭地へと路線変更を貫徹した結果、その後新羅都核心地区に設置された現在の都心が外郭地の新都市に移転されることになると、都の復元がより容易になされると判断されます。

近年、「古都保全法」が立案され、慶州都市内において、民家移転により大規模な古墳群の原型を取り戻すことが

できました。この古墳群は考古学的な調査結果によると、紀元前350年から550年までの約200年間、慶州地域でのみ確認される積石木槨墓の構造をなしており出土遺物は金や銀の製品などが多く発見され、新羅は黄金の国と呼ばれました。古墳群の原型修復、復元がなされるのであれば、新羅人の暮らし、そして財政感覚が垣間見える野外展示館の役割を果たし、文化財保存の成果であるとみなされます。

慶州地域においては原子力発電所があり、近年において放射性廃棄物処理場が建設されつつあります。史跡全域80万坪に対する調査を私が担当しております。国家において放射性廃棄物処理場が建設される地域では、多くの支援施設が構築されることにより、慶州の市民はそれに賛成したのですが、放射性廃棄物や原子力発電所の事故が起きた場合、文化財に対する被害対策はなく、歴史都市のイメージが壊れるのではないかと予想しています。

韓国においては十数年前から地方自治体の実施され、市長や団体長などが市民や地域住民によって選出されます。そのため、市民の文化財保護法で規制されている地域に対する介助及び開発圧力に対する働きかけが容易でなくなり、急速に遺跡が壊され、文化財景観などもその保全が難しくなっています。歴史都市の市長や団体長は、国家による文化財に対する専門家を任命することが望ましいと思われれます。私は、歴史都市慶州の人間として多くの問題を痛感しています。慶州は慶州市民と韓国の国民のみによって保護、保存され、恩恵を受けるべきではなく、東アジア、ひいては世界中が関心を持ち、保存、保護されるのであれば、ユネスコにおける理念のように全人類がその恩恵を受けることができると思います。

消えつつある慶州の近代文化遺産

以下、韓国社会で急速に消えつつある近代文化遺産に対して、簡略に紹介することにいたします。柳宗悦の工芸論においては、産業技術の発達により質の高い製品が大量に生産、また安い値段で普及され、だれしものが使用できることから文化の平等性を持つことができると表現されている反面、手作業の時代においては、作り手が道具を利用し、製品をつくる時代であったのですが、産業化社会においては機械が主体となり、人間が機械に付随する形であるとの矛盾が述べられました。

産業技術と科学技術が急速にその姿を変えていく社会において、韓国において最も急速な変貌を見せている部分は、農漁村の生産意識です。この写真は麻窯です(写真3)。数千年間において人間の体を保護してくれた代表的な織物の一つは麻ではないかと思えます。麻の栽培、収穫、そして麻が完成されるまでは相当の労力を必要としますが、労力に比べ、金銭的な価値が余りにも低いとの理由か



写真2：慶州競馬場予定地

ら麻は消えつつあります。数千年間において私たちの体を保護してくれた麻が、代替繊維の開発によりその姿を消しているのです。このような実情に対しては、今すぐにでも着々と保存を徹底しなければ、私たちの子孫は近代の文化遺産でさえも博物館において勉強せざるを得なくなり、民族固有の実体験を忘れかねないのです。

次は木炭窯です（写真4）。第二次世界大戦が起こる前、全世界のエネルギーの大半は木炭によるものでありました。しかし、今は電気、オイル、原子力などの代替エネルギーの開発により木炭は消えつつあります。韓国においては、今、木炭窯は木炭の生産ではなく、チムジルバンという韓国式の伝統サウナにおける役割を果たすものとして変わりつつあります。

次は、須恵器窯、瓦窯ですが、現在では大規模な工場で作業がなされており、手作業による生産などはほぼ見られなくなりました（写真5）。私は、1994年、大学博物館の助教授であったときに、慶州において瓦窯を調査する際に、ここにいらっしゃる吹田市立博物館の藤原学先生を案内させていただいたことがあります。そのときはまだ慶州においてはたくさんの昔ながらの窯があったことから、さほどそれが重要であるとは感じませんでした。ですが、何年か過ぎた後にあれだけ多かった瓦窯はその姿を完全に消してしまいました。当時の様子は現在、吹田市立博物館の展示室のみにおいて見る事が可能であり、それに対する記録が韓国には全く残っていないとのことは残念でなりません。これをきっかけにして私はふだん、何の関心を持たないどのようなものであれ、いつかは大事な文化遺産になるとの事を、その姿が見られなくなった後にしみじみと感じたのであります。

私は2年前に亡くなった今村昌平監督の「楢山節考」を見て、日本、中国、韓国は自然環境や風土によって習慣が違って、親孝行に対する概念は同じであると感じました。きょう日本、中国、韓国の国際シンポジウムにおいて発表された主題はおのおの異なりますが、私たちの暮らしの大切さを喚起させてくれる文化遺産の新しい価値を広く知らせ、その保存に励むためのものであると思います。今日私が先生の皆様から学んだことは、帰国をしてから行政にじかに反映されるように努力してまいります。

有益な言葉を述べる機会をくださった関西大学のなにも・大阪文化遺産学センターの高橋先生を初めとする先生の皆様方に感謝申し上げます。（拍手）



写真3：麻窯



写真4：木炭窯



写真5：瓦窯

観光からみた韓国の文化遺産

金美貞（韓国文化遺産観光コーディネーター）

こういうシンポジウムに、自分の原稿を発表するのは初めてで、結構足がぶるぶるしているんです。初めまして。私は、韓国の釜山で観光会社に勤めて、観光案内している金美貞と申します。よろしくお願いします。

最初、パネリストとして発表を頼まれたとき、今発表なさっている皆様に比べても、一番学歴がないので、何を発表したらいいのか、すごく悩みました。自分の仕事が観光案内でずっとやっていたので、仕事のことと、仕事をしながら感じたものを皆さんにちょっとお話したいと思いました。

私は釜山で勤務しておりますので、釜山から出発して、普通にパッケージツアーで案内する所は、いろいろ多いのですが、今回は、釜山のポモサ、梵魚寺というお寺、そして、世界遺産を韓国でも一番多く持っている町、慶州の4か所の文化遺産について紹介しようと思っています。



金美貞氏

釜山・梵魚寺

釜山は今、約380万の人口で、韓国第二の都市になっています。貿易港で知られているので、港町としてよく知られている町なんですね。そういう町なので、歴史的なものといったら、これというものはないかなと個人的に思って、梵魚寺を選びました。この梵魚寺、ポモサというところは、資料に書いてありますが、「金の井戸の山」と書いてあるんですね。「金色の井戸が山の上であって、梵天から金の魚がおりてきて、その井戸で遊んだ」ということが説話や神話の類にあり、お寺の名前になっているんだそうです。

建築年代は、678年、これもまだ新羅時代、その56人の王の中の文武、ブンブと発音なさるんですけど、韓国の発音はムンブワンと発音する王様るとき、創建されたと言われています。はっきりした創建時代ではないんですが、私たちは観光案内の時にそのように説明しているんです。今、写真の方がその正面、ポモサの正門の写真です（写真1）。歴史観光というよりは、釜山市内にあるので、釜山市民が、金井山へ登山で散歩したりしています。そして、韓国でもお寺は、宗教的なすごく大事な意味を持っているので、梵魚寺も信者がすごく多いお寺になっているんです。

次の写真は、女性の方が拝んでいるんですが、これは大学入学試験を前にすると「百日祈り」というのがあって、韓国の母親たちは、こういうふうにお寺に入って3000拝をしていたのです。その拝む様子を撮ってみたんですが、ひじ、ひざ、全部床につけて拝んでいます（写真2）。座布団がすごく長く日本では見られない座布団なんですが、こんな形をしているんです。6月終わりに撮った写真な

んですが、3000 拝の途中でちょっと立ち上がったときで、写真には見られないですが、この女性は汗でびっしょりです。ちょっと休憩入れて、また 3000 拝。やっぱり子供の大学合格を祈る。基本的に 3、6、9 の間に基本あいさつが入るんですが、お願い事があるときは 108 拝や 3000 拝をします。ごく大変な母親の役割をしているんですね、韓国のお母さんたちは。こちらはポモサ、梵魚寺の山の景色です（写真 3）。山もきれいで釜山市内からも 2、30 分で来られる場所で、信者や観光客、一般の人も多いところなんです。



写真 1：梵魚寺（ポモサ）正門



写真 2：礼拝の様子



写真 3：梵魚寺の山

慶州の文化遺産と観光

慶州については、さっきも説明がありましたが、紀元前 57 年に王朝が始まったんですが、朴赫居世は紀元前 69 年に紫色の卵から生まれたと言われていたんですね。生まれて、57 年。もう幾つもなっていないんですけど、国を建てて新羅王になったんですね。それで、紀元前 935 年に滅びるまで、約 1000 年間、新羅王朝の都としてこの慶州はずっと続いてきたんです。

その新羅の都の慶州では、石窟庵、仏国寺、博物館、古墳群などを見て回るんですが、こういうところも含めて慶州には遊園地、ゴルフ場、そしていろんな設備もあって、リゾート地としても有名な場所なんです。これらすべての移動時間が 30 分以内で、観光、休養すべてが 1 か所でできるとは思っているんです。その中でも、石窟庵、仏国寺は、1995 年には慶州歴史遺跡地区、2000 年には世界遺産に登録されています。

（石窟庵）

まず、石窟庵ですが、今写真に見えているのが吐含山という名前の山です（写真 4）。ハクとフクムの字を使うんですが、慶州市内から約 30 分ぐらい走った所にあります。そこから東の方向には山があって、海拔は 745 メートルぐらいで山の目の前がすぐ東海、皆さんがおっしゃるところの日本海です。この名前は今、韓国と日本どっちが先か後かという議論があるんですが、その海を臨むすぐ

く眺めのいいところに石窟庵があるんです。

吐含山という名前は、すぐ目の前に海があるので、湿気がものすごく多い山で、いつも年中雲がかかっているため、雲を吐いたり、含んだりしている山だということでこういう名前がついたと聞いています。年中霧がかかっているような状態なので、私も、週2～3回ぐらいこの吐含山、石窟庵に訪問するんですが、1年通じて2回ぐらいきれいなオミヒを見られるような感じの景色を持っているところなんですね。

よほどついてないと、すてきな景色、海までの眺めは見られないような場所なんですね。

その石窟庵の建築は、751年、金大城という名前の人が自分の前世の親の冥福を祈るために建築したと言われているんです。写真は入り口の説明をするような場所で、日本語・韓国語・中国語の説明が書いてある場所です（写真5）。こちらが東の海を眺める。写真を撮りに行ったときもやっぱり曇っていて、きれいな海までは見えなかったんです。

全体的な形は前方後円形になっていて、（写真6）円形の石室のドームの真ん中に花崗岩で約350cmぐらいの高さの座像があって、その壁を大きい磨崖仏が囲んでいるんです。3体ぐらいの磨崖仏が壁を囲んでいるんですが、真ん中が四天王像、そして金剛力士、十一面観音や十大弟子、仁王などが壁を飾っているんですね。ここが1913年から1915年まで解体修理された跡。そして、1920年、61年と2回にわたってまた修造工事があったと聞きます。

現在でも問題があるので、室内観覧がガラス張りになっていて、中にも入れないようになっているんです。お寺の関係者は室内、つまり前方後円の円の方に入れるようになっているんです。しかし、年1回お釈迦様の日、韓国では4月8日、陰暦で数えると5月何日ぐらいになるんですが、その一日だけは室内に入ってこういう浮き彫りの彫刻とかが全部目の前で見られるので、そのときはすごく感動があると思います。

（仏国寺）

仏国寺も同じ吐含山の、石窟庵が東を向いててこの仏国寺が南を向いているような形をとっているんです。石窟庵は前世の両親のためといいましたが、同じように、この仏国寺は751年、金大城が現世の両親のため建築したと言われているんです。建築当時は65mぐら



写真4：吐含（トハム）山



写真5：石窟庵入口付近



写真6：石窟庵外観

いの結構大きいお寺だったと聞いているんですが、今観光できるところは5、6か所ぐらいの仏殿を回るようになっているんです。

木造建築が結構古いんですが、木造はもうほとんど残ってないような、もう全部復元というんですか、修造されたような形なので、建築当時の本物が残っているところが国宝に指定されて、それを中心に見て回るような形になってます。木造建築は燃えやすいという欠点があるので、燃えているんですが、仏国寺を案内するときによく出てくるのが、秀吉の話ですね。文禄・慶長の役というんですか、秀吉のときに木造の建築が燃えましたという話も出てきますし、あと何回も火事で全部燃えてしまったので木造部分は全部復元されているものです。今は、日本では本殿という名前なんですけど、韓国は大雄殿という名前と呼んでいる仏殿などの建物が約300年前に復元されて、木造ではそれなりに古い建物になっています（写真7）。これが多宝塔ですね。それと釈迦塔（写真8）。世界遺産、国宝になっているところです。あと仏殿の方ですが、韓国ではお寺の中の仏像に対してカメラを当てるのは失礼ということになっているので写真がちょっと撮れなかったんで、これぐらいにしました。

これは、毘盧殿という建物、毘盧遮那仏という名前の仏像、国宝の仏像を祭っている建物です（写真9）。こういう感じでちょっと見えるんですが、室内がちょっと暗いですね。そして、これは最後、仏国寺の一番眺めのいい写真で雑誌とか必ず出てくる写真なんです（写真10）。こういう形になっています。

それと、さっきの話の続きなんですけど、こういうところの国宝をずっと見て回るんですが、文化財がいろんな時代に焼失とかされたケースが多いので、そういう話を皆さんに話す場合もあるんです。植民地時代とか韓国動乱一朝鮮戦争と日本では呼んでいるんですけど、そのときに文化財焼失という件がすごく多くて、その受け入れに対しても少し皆さんに触れる場所でもあるんですよ。

例えば、釈迦塔の話があります。1966年、慶州市内の骨董品屋さんが夜入ってきて、屋根の中の舍利函を盗もうとした未遂事件があって、捕まったのですが、その事件があってからはその中身は慶州博物館に保存管理されています。お金になると思って何でもできる人間のしわざじゃないかと思いますね。

また、毘盧遮那仏がいる毘盧殿という建物の横に、仏国寺舍利塔というのがあって、宝物になっているんです。これも植民地時代、日帝時代に焼失されたということがあって、返してもらったと表現していいでしょうか、関野貞という方によって、日本に闇のルートで持っていかれたということがわかり、1906年、上野の精養軒という洋食店のお庭にあるのが発見されて、努力してくださって、1933年に朝鮮総督府に正式に寄贈という形式で返還、返してもらった大事なものです。



写真7：仏国寺・大雄殿



写真8：仏国寺・多宝塔



写真 9：仏国寺・毘盧殿



写真 10：仏国寺

(天馬塚)

天馬塚、これも慶州の有名な景色の中の1つなんです（写真 11）。円形の大きい古墳が町の中にいっぱいあるので、訪れるとすごくすてきなイメージを持つ場所なんです。慶州市内でも 23 基ちょっと集まっているところを公園に調整しているんです。大陵苑という名前の公園の中に天馬塚、こちらになるんですが、発掘調査をして室内を展示室に調整しているんです。中に入って古墳の中のつくりがどういうふうになっているのかなど見て回るような形式、つくりになっているんです。こちらは約 1500 年前つくられたと言われてますし、副葬品が約 1 万 2000 点ぐらい出土されたということ、そして入ってみると黄金の飾り物がずらっと並んでいるので、すごく楽しく見て回れる場所なんです。最近ゴルフの料金も高くなってちょっとうれしく思える場所になっています。本物は全部博物館に展示していますが、こういうお墓を訪問すると、お客さんから質問が出るのが「韓国まだ土葬でしょう」という話なんです。親に対して火葬よりは土葬をしてあげたいという気持ちがまだ強い国が韓国ですから

ね。最近新聞に出たんですが、10 年に土葬と火葬率が 7 対 3 だったんです。それが 2005 年を境に 5 対 5、そして今は火葬が少しずつ上回ってきているんです。未来のためにはすごくいい方向にしているのではないかと思います。

(慶州国立博物館)

あと博物館です。慶州国立博物館は大きくはないですが、すごく趣のあるところで、展示されているものもすごくすてきなものが多くて、案内するときも私もすごく誇りが持てる場所なんです。最初見えるのが黄金の飾り物、純金のいろんな飾り物がずらっと出てくるので、すごく目の保養になるのではないかと思います。このような感じのつぼの中に卵が入っていて、1500 年も前の卵が化石化されてきれいな形で出てきている。それで博物館に展示して、子供たちがすごく喜ぶところなんです。こういうゴールドのお皿、飾り棚ですね。イヤリング、こういういいものもいっぱい出てきたので、ブレスレットとか王冠、こういう形の。王冠の飾りとして出てきたものだと思うのですが、蝶の形をしている飾りなんです。こういうネックレス。ここには西洋人の顔が象嵌されているのかいてあるんで、目のすごく大きい人間の



写真 11：天馬塚

顔が、東洋の人じゃなくて西洋の人の顔ができている瑠璃、ガラス玉がショウミついていたと。これはルビーとかを散りばめた宝剣。

(野外展示)

そして次ですが、また韓国でちょっと変わっていると思うところなんです。博物館の展示、野外展示のところに石仏がいっぱい置いてあるんですが、それは全部鼻が削られているんです（写真12）。これは、韓国だけのものだと思うので、ちょっと説明しようと思います。全国的に石仏の鼻が削られているのは儒教の影響なんです。嫁に行って長男を産まなかったら自分の立場が全然なく、血縁とかすごく大事にする民族なんで、嫁に行って長男を産むまで女性がすごく頑張った証拠なんです。石仏の鼻を削って、溶いて飲むと男の子が生まれるという民間の話によるものなんです。これぐらい切迫した時代だったんですね。それはチョウサンという15、6世紀の時代の話なんです。こういう博物館は1時間以内で、疲れないうちに全部見て回れるからすごく見るかいがあると思います。

現在の文化遺産観光を通して感じること

そして、最後の話ですが、自分が仕事しながらずっと重ねて考えてきたもので結論は出そうとしても余り出せないかもしれませんが、自分なりに考えたものをちょっとお話ししたいと思います。

普段からツアーでいろいろ見て回るときに、日本との戦争や侵略などにかかわるところがすごく多いんですね。この写真は釜山市内の龍頭山公園にある李舜臣將軍の銅像なんです（写真13）。ご存じの方もいらっしゃると思いますが、秀吉の朝鮮出兵のときに海戦ですごく業績を残した人なんです。公園に大きく銅像をつくって、子供たちもみんなに見てもらおうようになっているところ。だから周りには説明をするような場所になっているんですね。こういう形になっています。これはチョンパル（鄭撥）という名前の將軍なんです（写真14）。こっちも釜山駅から少し離れたところ、中心街のど真ん中にあります。この將軍も戦争が始まって一番最初に上陸した小西行長との戦争で最初に死亡した將軍なんです。場所もここで、こちらに銅像がつくってあるんですね。そして、こちらは子城台と書いてある、チャソンデと言って、海辺の方を向いていて、こちらにも戦争のときに毛利輝元という人によって築かれたと言われている城なんです。この写真は、釜山から日本へ通信使を出すときに政府、ソウルの方からおりてきて、釜山のここから出発しますので、船道の安全を祈る場所に建物が今見えているんです（写真15）。

このように、釜山もいろいろありますし、慶州へ行ったらまた仏国寺の話とかいろいろあるんで、こういうことに対して説明をされるとお客さんの反応が結構いろいろ得られるのですが、たまに、かーっと怒られて「韓国ってこういうところしかないのか」とかおっしゃるんですよ。一方、「申しわけございません」とかおっしゃってくださる方もいたり。皆さんを責めるようなところじゃないんですが、黙ってしまって何も表現してくださらない方とかもいらっしゃるんですね。まあ、ちょっと個人的には戸惑う場所なんです。お客さんを



写真12：野外展示の石仏

責めるとか、こういうことを日本はやりましたとか、そういうことを言いたくてやっているのではないんですね。すべて何事でも歴史の中のことなので、これも観光の中の1つじゃないかと思って説明するんですが、実際は触れないようにするときも多いですね。やっぱりちょっとひやっとしてくるような雰囲気は怖くて、もう何も言わないとか、そういうときもあるような実態で。ほかの友達に話を聞いても「やっぱりちょっと触れない方がいいんじゃない」という人もあったりするんです。ちょっと強引な友達は、「ありました」とか言う人もいますが、大半は軽くとかあまり触れないとか、そういう軽い感じで回るところなんですね。お客さんがお金を出して旅行にいらしたので、いいことばかり回る、それもいいんですが、こういうところも説明した方がいいんじゃないかな、と考える時もあるので、最近はちょっと説明をするようにしています。

私は仕事を約12年ぐらいやっているんですが、最近になってツアーのパターンがすごく変わってきているんです。触れ合いということをすごく大事に思うので、修学旅行を行うと、必ず現地、釜山やソウルの学校と交流会をしたりサッカーをしたり、もういろんなスポーツ交流があります。そして今、韓流じゃないですか。「ヨン様」とか言って皆さん、韓国語をすごく上手にしゃべれる女性も随分多くて、そういう個人的な触れ合いなどがすごく深まる。これからも、どんどん深くなる時代になるんじゃないですか。こういうときにこういう考え方でいいのかと思うようになったんですね。

自分が受けてきた教育ですらも、ウルトラナショナリズムとかいうんですか、自分の国ばかりいいところだとか、私も学校のときに、大変すばらしい民族だというような教育を受けてきたんですが、そういう方向が「他より優れた」という感覚で教えられたような気がするんですね。最近は、日本・中国より韓国がいいとか、そういう比べるような教育はちょっと違うんじゃないかなという考え方を
するようになっていきます。もっとクールな意識を持ってお互いにありのまま受け入れる考え方ですね。そういう感じからまたすてきなフレンドシップができるんじゃないかと思うようになっていきます。まとまりが滑らかじゃないんですけど、こういう感じで発表させていただきました。ありがとうございます。(拍手)



写真 13:李舜臣像(釜山市龍頭山公園)



写真 14:鄭撥像



写真 15:子城台(チャソンデ)遠景

報告・日本

日本における事例 重要文化的景観選定第1号「近江八幡の水郷」

奈良俊哉（近江八幡市文化政策部文化振興課文化財専門員）

皆さん、こんにちは。奈良でございます。（拍手）本日は関西大学にお招きをいただきまして、本当にありがとうございます。私の勤めてるところは滋賀県の近江八幡市でございます。今お話があったように秀吉と非常に縁の深いところです。近江八幡市は、秀吉の甥に当たり、後に養子になる、豊臣秀次が居城し開町したところです。ここで近江一国の支配を始めるわけですね。そのときに八幡山城という城をつくり、その八幡山城の堀としてつくった八幡堀、これが今の近江八幡のまちづくりの基礎になっているところでございます。



奈良俊哉氏

そのまちづくりのもとになりました八幡堀があるわけですが、城下町から在郷町へと変化した時依頼の、住民によるまちづくりのパワーが、まちづくりや景観づくりにずっと今まで生きております。いまだにその勢いは衰えておりませんで、そのすぐ横にある近江八幡の水郷を文化財保護法で新しくなりました重要文化的景観の選定の第1号にすることができたというわけなんですね。先ほどちょっとその辺のお話が金美貞先生の方からありましたので、ああ、そうだなと思い出しながら聞いていました。実は私が住んでるところが長浜市です、長浜は秀吉が一番最初に作ったお城のところでもあり

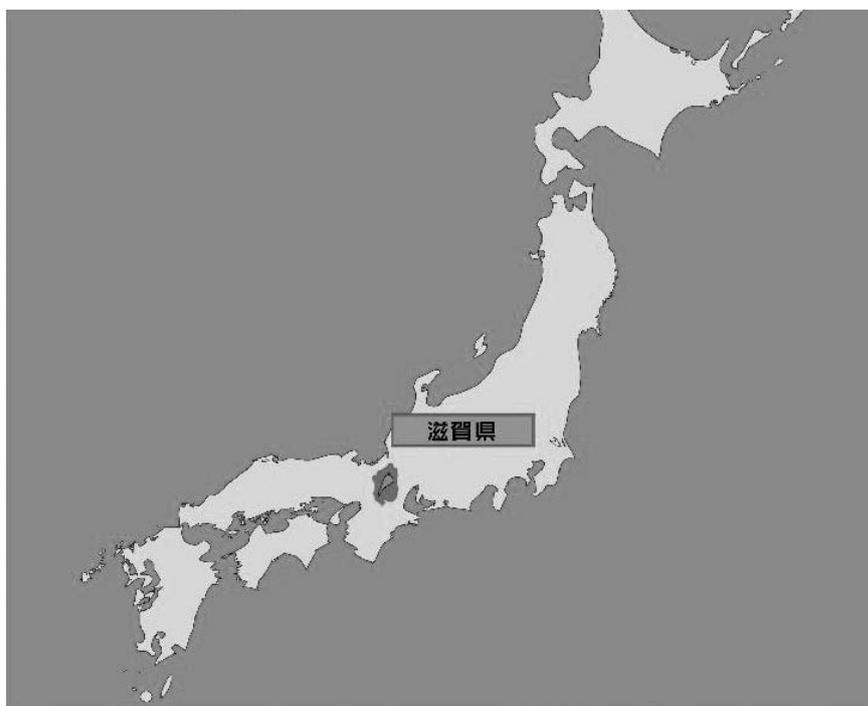


写真 1-1：滋賀県の位置

ますし、まちづくりも黒壁という象徴的な建物を中心として頑張っている町であります。近江八幡市とも随分深い関係があるなと思いながら聞いておりました。それでは、きょうの本題の方を始めますのでよろしくお願いいたします。

近江八幡市の景観計画

国際シンポジウムということですから、まず海外の方がたに私どもの近江八幡市をよく知って欲しいなと思ひまして、こんな図をつくってまいりました（写真 1-1）。日本の地図でして、滋賀県はほぼ中央で、ここです。滋賀県には、これが日本で一番大きい、内陸湖である琵琶湖があります。その東岸のほぼ中央にある、人口約7万の小さな小さな都市が近江八幡市です。

ただし、近江八幡市にはおもしろいところがありまして、これが琵琶湖ですよ。内陸の湖ですけども、ここにちょっとピンク色があります、これ島ですよ。湖にある島です。この湖にある島には住民がありまして、小学校まである島なんですよ。こういうふう湖のところに島があって、そこに実際に人が住んでいて小学校まであるというのは、この近江八幡市の沖島というここしかないんですよ。そういうふうな非常に特徴的な場所でもあるということをご理解ください（写真 1-2）。



写真 1-2：近江八幡市



空から見た近江八幡市

それで、今日ご紹介する近江八幡の文化的景観ですが、まず文化的景観とは何かということをご説明します。この言葉の対義語は自然的景観です。こちらは人の手が一切入らない自然のみで構成されている景観ということ。例えば屋久島・白神山地などです。これに対して人の手によって守られて来た景観を文化的景観と言います。里山や棚田等がその代表です。

その文化的景観を新しい法制度によって守っていかようとしています。これはまず「景観法」という



写真 2：近江八幡市景観計画・6つの風景ゾーン

新しい法制度がありまして、この法制度は、国土交通省が中心になって策定され、平成 17 年に施行されました。この「景観法」の中で、「景観計画」という建物を建てる時の行為基準を決めることができる計画です。この景観計画を決めて、この計画の中でその地域をさらに「文化的景観」として位置づけをします。その位置づけができた地域で、さらに我が国の歴史や生業、そういうものを語る上で非常に重要な部分であるという所を「重要文化的景観」という形で文部科学省が選定するという形になります。ですから私どもは、まず景観法による「景観計画」をつくらないといけないものですから、近江八幡市の景観計画づくりから始めたのです。

近江八幡市の景観計画と言いましても、近江八幡市は先ほどこちょっと説明しましたが湖岸から若干内陸の方までありますし、もちろん J R の駅で新快速もとまる駅もあります。ですから色々な特徴的な風景があるので、このように 6 つの風景ゾーンに分けることができます (写真 2)。よく景観計画を立てるときに難しい選択をしている所がお有りのようで、例えば 1 つの市域を同じ景観計画で同じような基準で立てていこうとすると、こういうふうに多様な風景を持っているとできなくなる、あるいは市民から賛同を受けない基準となる等するときがあります。一律に指定するという事は、地域に特徴を消すということにもなり不可能な話ですよ。ですから、私どもは最初から、それなら

それぞれ分けちゃおうと。その分けちゃったところでそれぞれ景観を分類して、特徴を掴み基準をつくっていったらいいのではないかなというふうに思ったわけなんですね。

近江八幡の「重要文化的景観」とは

近江八幡市域を特徴的に分けてみますと、いわゆる「重要文化的景観」にしましたこの「水郷地域」の部分と、それから先ほどちょっと言いましたこの沖島のある「湖岸」の部分、これは当然のようにまた違うところです。それから、近江八幡市は何と言っても田園都市なので、水田がたくさんあります。だから、「田園」の地域、農村の部分は農村の部分でまた分けとかなくちゃいけません。それから、この「旧市街地」、これは旧城下町です。城下町と言っても近江八幡の場合は10年しかなかったですからすぐに在郷町になりますので、武家屋敷があるとかそういうものは一切ありません。残っている家はすべて商家の屋敷群です。それから八幡には2本の大きな道が貫いております。1本は中山道です。中山道の宿場町で武佐宿というのがございますが、これは近江八幡の市域内にあるんですね。それから、もう一つは朝鮮人街道という大阪から朝鮮通信使が江戸に上っていくときに通る道があるんですね。これは中山道を通ってるのではなく、草津、守山から分岐して湖岸の近くをずっと通って行って、それで彦根の方へ抜けていくんですね。鳥居本のところでまた合流するわけですが、その間を朝鮮人街道というふうに呼んでいます。ですから、「街道」があって、この部分にも街道のこういった古い町並みが並んでいるところがあるわけですね。さらに駅周辺や新しく開発された市街地等の「新市街地」もあります。

そうすると、以上のように6つの風景ゾーンに分けられるわけですから、まず分けて、それで一つずつ景観計画を決定していこうということを今やっています。首尾よく水郷地帯については平成18年に景観計画を立てることができました。

私どもの景観計画は、当初つくりました景観計画としてはかなり厳しい内容になっていると全国的にも言われております。その内容の1つを言いますと、高さ制限は10m以内、それから屋根については瓦葺きもしくはヨシ葺きにすること。この地域はヨシ葺きの家が建つ場所なので、ですから、ヨシ葺きの家を建ててくださいというふうに頼んでいます。まだ1軒も建ってはおりませんが…。瓦葺きの勾配屋根、当然勾配屋根ですね。そういうようなものをこの中に入れ込んでいます。外壁材ではなくて土壁にしてくださいと頼んでいます。色調はモノトーンで落ちついたものにすること。だから、そういうふうなことを水郷地帯の中では景観計画で行為基準として決定しております。そういう基準があって、それでヨシ地やら、水路やらがあって、ヨシ群落の保存条例があって、それで残すことができたということなのですね。

水郷をめぐる「重要文化的景観」の構成要素

では近江八幡の水郷ってどんなところなのと言



写真3：水郷めぐり遠景

うと、以上4つの大きな絵を提示させてもらいました。今の時期ですと、近江八幡は水郷ですから、水郷に必要なものは何かと言われたら1つに「水路」、その次に「ヨシ地」、それから「里山」があって「集落」がある。あとはその集落を支える「水田」。これらの大きい要素があるわけですね。この大きい要素がどういうふうに残っているか。その要素がまた今までどういうふうに使われてきて、それで今はどうなっているのだということを証明すれば、「重要文化的景観」というのはいいわけなんですよ。

今、写真ではヨシ関係を見てもらっているわけですが、こういう水郷めぐりがありますよね。両側を見てください。ちょっと見づらいですが、水田ですね（写真3）。そこのところに、ずうっと舟で水郷めぐり、観光船ですが、おじちゃんが一生懸命キーコーキーコー艦でこぎながら水路をずっと巡っていくという、そういうのがあるんですね。ここもそういうところですよ。こちら側はヨシ地で、ヨシ地のところと水田があるのですが、こういうところに水路がいっぱいあるわけなんです。

ヨシは大体1年草なので、春に芽吹いてちょうど冬の12月ごろになると高さが4mから5mぐらいになります。それがこの状況です。そうする刈り子さんという専門の方が出てきまして、今近江八幡市にはヨシ地が60haあるのですが、この60haをすべて手刈りで刈るんですね。60ha刈るんだから相当な刈りさんがいるかなと思いきや、去年6人でした。6人で60haを刈っております。だから、すごい量なんですね。よく見てください。刈りさんは別に水の中に入って刈ってるわけではありません（写真4）。



写真4：ヨシを刈る刈り子さん

ヨシは、皆さんの感覚はどうなのでしょう。淀川のヨシを見るのでしょうか、それとも琵琶湖の湖岸のヨシを見るのでしょうか。水の中から出ているヨシというのは、ああ、ヨシだねって普通は思うのですが、水の中から出てくるヨシは売り物にならないんですよ。曲がったりね、変色したりしてね。あれは売り物になりません。ですから、どういうものが売り物になるかと言うと、ヨシは地下茎でずっとつながっているのですが、陸地に生えるヨシ、こういうのを陸ヨシ（オカヨシ）って地元では呼んでいます。では水の中から出てくるのは何て言うのって言ったら、そのまま水ヨシ（ミズヨシ）って言うんですね。水ヨシの方はほとんど売り物にならないから、とりあえず刈っておこうか程度です。このごろは刈ることさえしなくなったところが多くなりました。

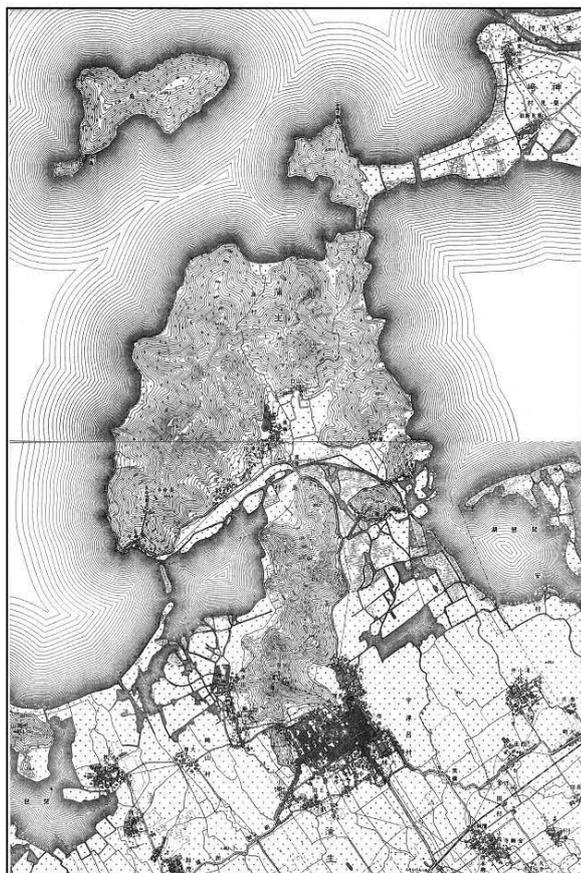
これは昔の話ですが、ヨシ屋根がたくさんある土地では湖岸のヨシなど水から出てくるヨシを刈って置いておいて、そのヨシ屋根の真ん中に入れるのですね。要するに人から見えないうちに入れるんです。では見えるところはというと、やっぱりそろっていて色がよくて、見ばえのいいものでないといけませんから、陸地に生えている陸ヨシを使うんですね。江戸時代の終わりのころにヨシ問屋さんがつくっている大福帳を見ましたら、ヨシの分類があるのですね。上上等、上等、中等、下等とあります。中等、下等は湖岸のヨシと書いてあるのですね。上等、上上等は陸ヨシですね。特にその上上等と言われている最高のものは、これはヨシの戸ですとか、それから床机ですとか、建築材とまで言いませんけど、そういうような内装の部分に使ったりするヨシもあるわけなのですね。

今、私どものところにヨシ博物館というところがあるんですが、個人経営をされているヨシ問屋さんがありまして、そのヨシ問屋さんの蔵を改造してヨシの製品をずっと置いてあるところがあるんです。そこにある床机は300年ぐらいたっている床机なんですね。300年たっても変色していませんが、悪くなってないのですね。そのぐらいヨシはもつんだということなのです。きちっと昔みたいに生活することはできませんが、ヨシ屋根を葺くサイクルがいま近江八幡では大体30年ぐらいというふうに言われています。本来は50年かもしくは70年ぐらい、下からいぶしをすればもつのですが、今は、そういうふうな生活状態ではないので30年ぐらいしかもたないというふうに言われております。

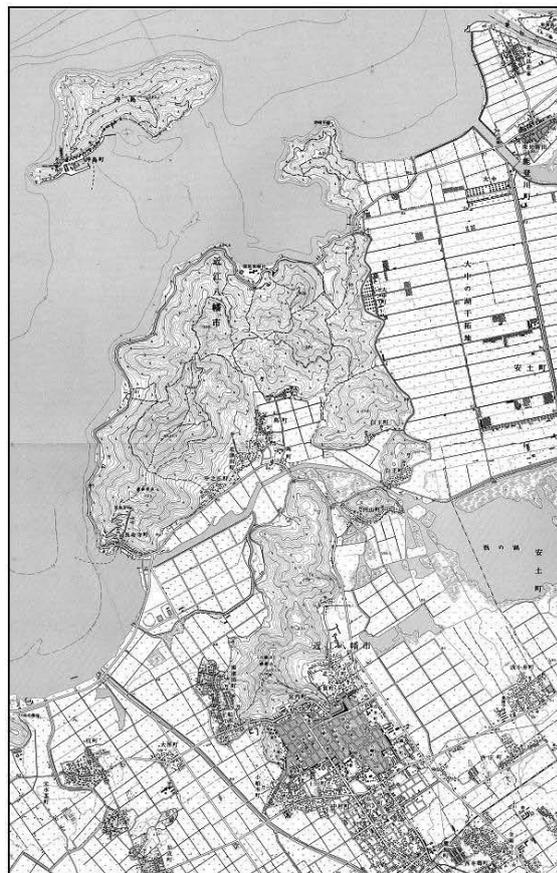
ヨシはいまだに産業として成り立っています。ついこの間までは、ヨシといえば葎簀ですよね。葎簀を知っている方が今日は結構いるなと思って見てるんですが、葎簀は中国産に今負けております。中国産の葎簀はやはり値段が安い。ところが近江八幡の葎簀は値段が非常に高い。そのかわり長持ちしますので、葎簀をお買いになる際はぜひ近江八幡の製品をお買い求め下さい。

近江八幡水郷地帯の変化

近江八幡の水郷地帯も実はものすごく変化しています。この地図を見てください（写真5）。昭和62年の新しい図と大正9年の図と、2つを比較しました。もう一目瞭然です。大きく変わるのはこの内湖の部分です。ここには大中の湖という大きな内湖がありました。琵琶湖の周辺には琵琶湖と



大正9年



昭和62年

写真5：近江八幡市水郷地帯の変化

は別に、区画はされてますが洪水時などは一緒になってしまうような内湖というもうひとつの湖がたくさんあります。昔、37個ありました。今はもう十幾つかしかありません。その中で最大のものがこの「大中の湖」というものです。それから、ここに津田内湖という内湖があったのですね。こっこの「大中の湖」の方は漁場でもありましたし貝もとれました。

それから、この内湖の周辺には当然のようにヨシがあります。今言っているところがちょうど円山、白王というところなのですが、この円山の周辺の点々としているところ、これがヨシ地ですね。一番いいヨシがとれたところが円山の集落の周辺です。これが大体60haぐらいあります。あとは湿田で、水につかってしまいます。湿地帯ですので、集落の前面のところまでずっと水路が来ています。

この図はかなり正確な製図ですが、田んぼはもっともっと細かい田んぼで、水路ももっと複雑に細かく入っています。自分の田んぼに行くのに他人の田を踏んでいくわけにはいきませんから、その分水路をつくって、それで舟で行くということをしていたのですね。ところが、湿地帯地域での水田の耕作というのは非常に難しいんですね。例えば今日のように大雨が降れば、「ワタカ」という魚がのぼってくるんですよ。その「ワタカ」という魚はのぼってくると稲の芽を食べてしまうんですね。だから、せっかく植えた稲を、ちょうど6月から7月に芽が出てきた、そろそろというところに「ワタカ」が来て食べてしまうと、もうその稲は全然だめになってしまう。そういうような場所でもあるので、この地域の方がたというのは非常にその部分については、生活の1つのルールというわけではないんですが、基準みたいなものがあります。1年でお米を全部食べ尽くさない、必ず米というものは残しておく。もしものために古米をずっとつくるわけですね。それがいつしか近江八幡のいわゆる質素儉約ということにも結びついてくるのですね。

八幡の商家というのは質素儉約ですごく有名になっております。その八幡の商家というのは、もともとは安土の城下町から来た人らがここでまた新しくニュータウンをつくって商家町にするんですが、ここだけで人が育つわけじゃありませんから、近所のこういう農家からいろいろな人が来るわけですね。そういう人たちが来て、農家をやめて商家になっていくわけです。農家にはその質素儉約という思想がきちんと入り込んでいますので、たとえ大きな商人になっても質素儉約を守っていくというのが近江八幡の商人の思想にもつながっているわけですね。

そういうような生活がつい最近まで送られていたのですが、戦後の食糧増産体制に入ったときに琵琶湖の周辺はどんどん埋め立て、干拓されて、大中の湖も干拓されました。それから、津田内湖もこのようにきれいに干拓されました。干拓が終わると次に圃場整備が入って、干陸化事業で湿田などもすべてきれいな田んぼに変わりました。ただし、こういうような地割といいますか、こういうところに島があったり、それからこういうところの堀があったり、そういうのは残ってるんですよ。この大地の地形の中にそういう記憶が残っているわけなのです、近江八幡の場合は。だから、こういうふうに変っちゃったのですが、このときの形がこういうふうに残ってますよ、ということの証明を私たちはさせていただいただけなのですね。それで「重要文化的景観」の選定のときのストーリーを調べて出していったわけなのです。

いったん古いところの写真を見てもらいましょう。先ほど言いました白王というところですね。これが大中の湖という湖ですね（写真6）。この先端は全部個人の舟屋です。港になっているわけですね。だから、舟がつけられるようになっています。地割は全部縦方向です。山際の方に母屋があって、真

ん中に道路があるのですが、この道路は、道路から上は水がつかないんだけど道路から下は水がつくんですね、今みたいな洪水になると。ここのところずっとこう通れる道で、ナカタ道という道がありましてね、このナカタ道をずっと通っていくと神社があるんですよ。その神社にみんな逃げられるようになっている。でも、その向こうのナカタ道も、今は大分家が建てかわりましたのでつぶれてはいますが、残っているところは残っています。横方向はそういうナカタ道ぐらいしか意識



写真6：大中の湖

がなく、実は縦方向に強い意識があるのですね。母屋があって作業場があって舟屋があると。だから、魚をとってきてここで揚げて、それで煮物というか佃煮にして出荷するというのをやりました。

それから、湖中にある田んぼですね。これも残ってるんですね。これ権座という名前なんですが、これは全部水田です。ここだけで1町歩ありますね。ちょっと今はやってないと思うのですが、1町数反、2町近くこの水田だけであるんですが、もともとこんな大きさじゃ無く小さかったのですよ。それを一人ずつ石を舟で運んで、それでまず袖垣をつくります。それからさらに下石を入れて、それで、こういう水路の周辺のヘドロをどんどんとって入れるんですね。それから、周囲の水路には水草が生えますから、その水草を秋から冬には全部刈り取るんですね、それを置いておくと通れなくなるので刈り取ります。刈り取った水草をさらにこういうところに入れていくわけです。だから、ヘドロはとれる、水草はとれるということでもいつもこの辺はきれいになっている。この辺の田んぼはいつもそういうふうな形で増やしていったのですね。だから、今度逆に、こうやって増やしてるところはいいんですが、増やさないと、田んぼがあったらヘドロは肥料にもなるし草も同様にその肥料になりますから、その土をどんどん上へ積み上げていく。それで耕作をしてるわけですね。そうすると、逆に今度田んぼが高過ぎて、水が上がらなくなるということもあるわけですね。そうすると今度は下の粘土を瓦屋さんへ売るので。

江戸時代の終わりぐらいからですが、近江八幡は、先ほどの八幡堀のところに瓦産業が勃興します。そうすると、瓦産業に必要なのは薪ですよ。それから粘土。これは絶対必要ですよ。その2つが水運によって運ばれてくるわけです。薪は周囲にいっぱいありますから、対岸やそれから湖北の方へ行ってヨシを売った帰りに薪を運んできます。材料の粘土はこの周囲の田んぼですね、水田からその粘土を買うわけですね。瓦の粘土で一番いいのは水田の下の粘土です。琵琶湖の粘土があるわけですから、そういうところの粘土を買う。だから、50年に1度そういうふうにして下の粘土を売って低くし、また上にだんだん積み上げていく。そうすると、また50年に1度高くなるからまた粘土をとる。そういうふうにして瓦の原材料ができるでしょう。それから水運でヨシも運べるでしょう。それから水田もできるでしょう。水がきれいになるでしょう。1つの環境循環型のクラスターがここではでき上がってたということですね。それも「重要文化的景観」の大事な要素でした。

それで、先ほどのヨシ地を一番いい角度から見ようかなと思って写真撮ってまいりました(写真7)。11月の終わりぐらいです。ここが円山という山、これが白王という山です。ここに集落が少し姿見えます。これが円山と白王の集落で、この部分は山に平行に家が建ってるんです。山に垂直にしてし

まうと、土地が狭くて隣近所にすぐぶつかってしまうのですね。ですから、自分の家の幅で、自分の家の幅というのが地割分ですから、それで一番奥に母屋をどーん作るのですね。だから屋根がみんなこっち向いてます。切妻造の平入りの屋根で平行につくっていくものですから、屋根がみんなこっち側を向いてるんですよ。だから、遠くからこの円山、白王集落を見ると、瓦葺きの大屋根がずっとこう見えます。そして下にこのようにきれいにヨシが生えて、里山の2つの山が見えて集落もあって、非常に風光明媚なところであるということです。

段階的な選定地域の拡充

「重要文化的景観」になった地域を再度地図で示したいと思います。いろいろ書いてあるんですが、この色のついてるところに書いてありますように一次、二次、三次というふうにして分けて選定の申し出をさせていただきました。というのも、なかなか地域の方がたの同意がとれないかなということもありまして、順番にやったんですね。一応この色のついてるところは「全部重要文化的景観」になりました。水色の部分はちょっと無視していただきたいんですが、この緑と黄色と赤の部分ですね。これで354haあります。昔の、これは八幡堀ですね。八幡堀も含んで水郷地帯。これは何でかな、ということなんです、八幡堀は瓦産業が勃興し、円山・白王と地理的な事だけでなく経済的にも繋がりが強かった事がわかりました。だから入っているのです。また八幡山の北川にある水路は、干拓された津田内湖の残りの、昔の護岸がここに残ってるところなんです。ですからここも入れさせてもらっています。それから西の湖から出てくる唯一の川、長命寺川という川なんです、ここも全部入れさせてもらいました。これで八幡山を中心としてその周囲を全て水郷地帯として「重要文化的景観」に選定されたところです。西の湖の中に境界線をこうやって引いてはありませんが、ここからこっちが近江八幡市、ここからこっちが安土町なんですね。残念ながら安土町の方は、景観計画の方がまだできなかったのも、「重要文化的景観」にはならないのです。それで、何か湖の中に線引くのも変な話なのですが、一応近江八幡市側だけ先やってもよろしいということでしたので、そのような形でさせていただきました。

以上、近江八幡の重要文化的景観はそんなことでやってきたんですよということがちょっとでもわかっていたらなというふうに思っています。また、後ほどしゃべる機会もあるかと思うので、ご質問があればそのときにまたよろしくお願ひしたいと思ひます。ありがとうございました。(拍手)



写真7：ヨシ地の広がり

パネルディスカッション

パネルディスカッション（まとめ）

当日のパネルディスカッションは、6名の報告を受け、コーディネーターの高橋センター長が質問をし、それについて各報告者がコメントするものとなりました。そこで出された主な議論と各コメントを以下にまとめます。

1. 「水の景観の環境保全に対して、それぞれの地域でどのような取り組みを行っているか」

まず、陳氏が、蘇州の川の汚染問題が解決しなければならない課題として蘇州の人びとに認識されていることを述べ、以前、フランスのテレビ局が蘇州の川の撮影申し出たが、汚染がひどいため断ったことを挙げた。

蘇州の川の汚染問題を受けて、呉氏が、蘇州市役所では、プロジェクトを立ち上げて進めていることを紹介した。

韓国については、金鎬詳氏が、古都慶州における水の景観保全については、新羅王朝前後の古代の地形を確認しながら計画的に進めていかなければならないことを提言した。

奈良氏は、近江八幡市は、琵琶湖の水質汚染が深刻であることに対して、河川周辺の住民がオイルフェンスを張るなどして表層ごみを集める作業に取り組んでいることを紹介し、地域の人々が水辺空間へ戻ってくる機会であると同時に、このような住民意識の高さが「重要文化的景観」選定の評価対象となったことを述べた。

2. 「文化景観というものは、観光と結びついたとき、破壊されてしまうおそれがあり、一体誰のための文化遺産なのかという問題が生じている現状があるが、このことについて普段お仕事をされている中でどのような状況を目の当たりにするのか」

金美貞氏は、韓国でもお寺というのは、お坊さんが修行をし、参拝者が祈りを捧げる神聖な場所であるにもかかわらず、マナーを守らない人たちがいること、さらに、仏国寺も本来は神聖な場所であるのに、修行僧もみられず、すっかり観光地化してしまったことを述べた。

楊氏は、文化遺産を多く抱えながら急激に成長する上海市では、過度な発展が目立っており、このような状況の中で、上海すべての文化遺産の一般開放については制限や限度があるが、上海の「民衆の」文化遺産をいかに保護し、有効に活用していくのかということが最大の目的であることを述べた。

3. 「誰のための文化遺産か、という問題とも関わるが、世界遺産に登録されることで、地域の住民たちは幸せになっているのかどうかという問題について、担当されているお立場からご意見をいただきたい」

まず、呉氏は、蘇州の庭園が世界文化遺産に登録されたことで、蘇州市民には、文化遺産に対する意識が芽生えたこと、それは「名誉」と「責任」であることを述べた。このことに関して、蘇州の「網師園」の近くの小学校を建て直す計画が浮上した時、「網師園」という全体の景観保護の観点から、建物を規定以下の高さに制限したという例を挙げた。

奈良氏は、近江八幡市が「重要文化的景観」第一号に選定されたことにより、この一年間で観光客

が60万人（240万人から300万人へ）も増加したことで、地元の人びとが地元の風景を再評価するようになったことを指摘した。続いて、近江八幡市の文化的景観計画の際に、地元住民から「近江八幡市が有名になるのはいいが、観光のためにやるなら同意しない」とはっきり明言されたことを紹介し、観光客を誘致しようという気持ちは市民そして市全体としても毛頭ないことを述べた。さらに、「持続的な観光」をするには、どうすればいいのかを考え、「その町に合った観光のキャパシティ」を模索する必要性を唱えた。

4. 「文化遺産を、未来に対するひとつの資源であると位置づけたとき、その文化遺産を保全する担い手である子どもたちをどのように育て上げていけばよいか」

まず、奈良氏が、近江八幡市の小学校における「総合学習の時間」を利用した環境教育がすすめられていることを紹介した。奈良氏自身も「重要文化的景観」選定地域内にある小学校の総合学習の時間を訪問した際、クラスの約8割の子どもたちが、自分たちの住んでいる伝統的な家屋に住みたいと言ったこと、「遊び場を返して欲しい」と景観を壊してきた大人たちに対するきびしい意見が出たことを挙げ、このような子どもたちを育てていく教育を望むことを述べた。

陳氏は、蘇州の小学校では、世界文化遺産である庭園のテキストが作られていること、また、課外活動として小学生を対象にした無形文化遺産の劇を上演していることを紹介した。

楊氏は、復旦大学の文物博物館学部の学生たちの文化遺産に対する意識の高さを指摘し、学生のなかには、母校である中学校が再建されようとしていた時、その中学校が歴史的建造物であることを主張し、再建を阻止したという事例を紹介した。さらに、最近では、文物学専門以外の学生たちにも文化遺産や歴史に対する関心が高まっており、他の学部でも、博物館学、文物学、文化財関係の講義が増えてきていること、上海博物館でアルバイトをしたり、そこで働くことを希望する学生が増えていることを述べた。



高橋隆博センター長



パネルディスカッションの様子

報告レジューメ集

民众与遗产：以上海为重点的若干考察

复旦大学文物与博物馆学系

复旦大学文化遗产研究中心 杨志刚

民众与遗产的关系，既是体现现代“遗产”概念之精髓的关键，也是现代社会考量文明程度的一项重要指标。如是说，乃基于笔者如下的思考结果：1、现代遗产观念的萌发，与近代公共博物馆的诞生同步。换句话说，反映在博物馆开放问题上的共享意识，构筑了现代遗产观念的一个重要基础。2、近几十年来，“遗产”的话语在全球范围爆炸并急剧扩散，此一过程显然与联合国教科文组织世界遗产项目的推动有关，但深层地看，则与全球化趋势中现代社会一些基本理念的重新熔铸相表里。正是站在这样的立场，笔者高度赞赏将民众生活与文化遗产保护相结合的考察视角。本文以上海的实践和经验为基础，探讨民众与遗产之关系的若干问题；先从公共博物馆入手，继而将视线扩展至历史建筑和文物保护单位的保护和利用。

中国的博物馆萌芽于上海。1868年，法国耶稣会传教士韩伯禄（Heude，又名韩德）来到上海，在西南角的徐家汇一那里是西方文化进入上海乃至全国的一个重要基地，创建博物馆，英文名称是：Museum of Natural History。1883年建成馆舍，中文名叫“徐家汇博物院”，每日午后准人参观，不收费，也无入场券。入门后须投名片，即有人招待参观。及至1929年，该馆并入震旦大学，并迁到吕班路（现重庆南路），改名为“震旦博物馆”。但震旦博物馆不向社会开放。

1874年由英国亚洲文会北中国支会创立的上海博物院（又名亚洲文会博物院），可称为在中国出现的第二个博物馆。1886年，该馆所在的圆明园路因此改名为博物院路（即今邻近外滩的虎丘路），可见其产生了一定的影响。正是有此背景，1895年，中国维新派建立的上海强学会提出建设博物馆，并将此立为四项要务之一。梁启超《论学会》一文也呼吁“开博物院”（载1896年11月5日《时务报》）。

回溯博物馆在上海的出现，是想表明这同时也是近代以来“民众与遗产”之思想的发轫。1857年秋天，上海文理学会（2年后改名为亚洲文会北中国支会）初创之时，《北华捷报》即发表评论，“相信它将成为……便利公众的文化资源”。1878年，文会自己明确提出，“上海博物院……要为公众服务”。据研究，19世纪90年代，该院已天天向公众开放，包括“周一、周二下午向华人开放”。（参见王毅著：《皇家亚洲文会北中国支会研究》，上海书店出版社2005年）

遗憾的是，由于各种历史原因，公共博物馆在上海的发展并不顺利，直到1949年才总共只有5-6家。除以上两家，还有警察博物馆（1935年创建，隶属于上海警察局）、上海市博物馆（1937年1月开馆）、中华医学会医史博物馆（1938年创建）和松江县教育图书博物馆（创始于1915年，1937年毁于战火）。何况开放的情况也不如人意。

上世纪的50和80-90年代，上海的博物馆有较快的发展，而今更处在大发展时期。根据1997年出版的《上海文物博物馆志》（上海社会科学院出版社），其时上海有博物馆、纪念馆34家，其他陈列室、陈列馆15家。如果数字能够说明问题，我想再举几个数字：

- 1、2002年，被上海市文物管理委员会认可的博物馆、纪念馆已达64座。
- 2、截至2007年6月底，上海的博物馆、纪念馆总数是106座。
- 3、预计到2010年，上海的博物馆、纪念馆将达到150座。

公共博物馆的增多，固然反映了民众有更多的机会亲近遗产、共享遗产。可是“民众与遗产”的关系，又绝不是简单地能靠上述数字来体现的。比如，如果博物馆不能吸引公众，门可罗雀，或者它与民众的生活毫不相干，那就很难说博物馆真正实现了其价值、遗产已被民众所共享。从这个角度看，上海的不少博物馆，都还有待改进工作思路和运作方式，在让遗产走近（或走进）民众生活方面多下功夫。

值得关注的是，“社区博物馆”的理念在最近几年得到传播，并对博物馆工作起到了方法论的指导意义。一些博物馆自觉地改变形象、拿出措施，吸引公众走进博物馆，同时也想方设法让博物馆进入社区、校园。由于社会总体发展水平的提高，这些年公众对博物馆和遗产的兴趣也逐渐升温，当然也就提出了更高的精神需求。

基于以上变化，真正意义上的社区博物馆开始出现。今年5月，我参观了高桥历史文化陈列馆，欣喜地发现“民众与遗产”这个命题在那里得到生动地诠释，我多年在博物馆学和文化遗产领域寻找的某些价值，在那里找到了注脚，得到了初步的落实。高桥位于浦东北端，是江南水乡古镇，1129年设乡，历史悠久，文物荟萃，人才辈出。高桥历史文化陈列馆由高桥镇创建和管理，征集了600多件展品，95%属真品，多数来自民间。它们不仅浓缩了高桥870余年的历史，反映了当地的生产生活和风土民情，而且积淀了收藏者对乡土文化的热爱，进而又激发了当地民众对社区的认同和自豪感。该馆的建筑也颇有特点，是一处傍水的民国时期砖木结构两层住宅，中西合璧，名仰贤堂，经动迁和维修后，用作展厅。该馆在今年“5·18国际博物馆日”正式对外开放。今年国际博物馆日的主题恰好是“博物馆与共同的遗产”，其中需要关注的理当包括：民众的生活与博物馆。

可以对上述话题进行补充或佐证的，是上海优秀历史建筑和文物保护单位等保护与利用的有关状况。上海已公布四批优秀历史建筑，共632处、2138幢，合计480多平方米。另有100多处全国重点文物保护单位和市级文物保护单位；四十处市级历史文物建筑（这三个系统有交叉）。在近年的国际博物馆日和中国文化遗产日（每年六月的第二个周六）期间，这其中的一部分，都会按照有关部门的规定，向市民开放。比如，2004年的国际博物馆日，上海23处优秀历史文物建筑免费向市民开放一天，参观人数达到4万6千人次。2005年5月下旬的双休日，40处老建筑免费开放两天，参观人次达17.7万。一些参观点人满为患的现象，在今年文化遗产日的免费开放中，同样表现得很突出。这既显示了民众向往、亲近遗产的热情，也体现了民众与遗产之间客观上所存在的距离。今年4月5日我在考察作为上海市级文物保护单位“四明公所”时，遭遇邻近某保险公司门卫阻拦的经历，更折射出问题多多。问题的核心，或许可表达为：谁的遗产？谁的遗产保护？

上海是中国较早关注“民众与遗产”之关系的地方，时至今日，这个城市有它的成功之处，然而不足也是明显的。如果对中国文化遗产事业的发生、发展，建立一种文明观加以审视，则“民众与遗产”之关系就是衡量文明程度的一个重要标杆。有意识地以此引领中国文化遗产事业当下和未来的发展，将有助于确保这项事业是健康的、可持续的。

蘇州文化與列入世界文化遺產名錄的蘇州園林

中國蘇州市職業大學吳文化研究所所長 吳恩培教授

一、蘇州古典園林申報世界文化遺產備忘錄

- (一) 1997年12月4日，在義大利那不勒斯召開的世界遺產委員會第21屆大會上，正式批准以拙政園、留園、網師園、環秀山莊為典型例證的蘇州古典園林列入《世界遺產名錄》。
- (二) 2000年11月30日，在澳大利亞凱恩斯召開的世界遺產委員會第24屆大會上，又通過把滄浪亭、獅子林、藝圃、耦園和退思園作為“蘇州古典園林”的擴展項目，列入《世界遺產名錄》。
- (三) 世界遺產委員會在審定這一項目時對蘇州古典園林作出了高度的評價：“沒有哪些園林比歷史名城蘇州的園林更能體現出中國古典園林設計的理想品質，咫尺之內再造乾坤。蘇州園林被公認是實現這一設計思想的典範。這些建造於11-19世紀的園林，以其精雕細刻的設計，折射出中國文化中取法自然而又超越自然的深邃意境。”

二、蘇州古典園林的历史发展

(一) 春秋時期，以夏駕湖、姑蘇台為例證的吳地王家園林的出現

陸廣微《吳地記》記載：“夏駕湖，壽夢盛夏乘駕納涼之處。鑿湖為池，置苑為囿。”“闔閭十一年，起臺於姑蘇山，因山為名，西南去國三十五裏，夫差復高而飾之。越伐吳，焚之。”又云：“闔閭十年築，經五年始成。高三百丈，望見三百里，造曲路以登臨。吳王春夏游姑蘇臺，秋冬遊館娃宮、興樂華池、南城之宮。又獵於長洲之苑。”太史公云：“余登姑蘇（臺），望五湖。”案：五湖去此台尚二十餘裏。”

(二) 东汉时苏州连家園的记载

《吳門表隱》卷一中提到他在蘇州的一處私家園林：“连家園在保吉利橋南。古名笮裏，吳大夫笮融所居。”同治年間編纂的《蘇州府志》全文錄此條時作“笮家園”。《三國志·吳書·劉繇太史慈士燮傳第四》曾附帶記載了園主的情況：“笮融，丹楊人。”

(三) 魏晉時期，以辟疆園為例證的蘇州私家園林的定型

《晉書·王獻之傳》等典籍記載了在中國書壇上頗負有盛名的王獻之，以其狷傲與無禮，終成了“辟疆驅客”這一故事中的被逐者。與這個故事一同留在歷史記載中的，就是蘇州东晋时著名的私家園林——辟疆園。

(四) 宋元時期，以滄浪亭、獅子林為例證的蘇州園林的成熟

詩人蘇舜欽（字子美），因被捲入黨爭受牽連被貶。從北宋權力中心東京（今河南開封）被放逐來到蘇州建滄浪亭。而獅子林，則如《蘇州歷代園林錄》所介紹：“元至正二年，天如禪師的門人惟則請朱德潤、趙善良、倪元鎮、徐幼文等共商疊成。”

(五) 明清時期，以拙政園、留園、網師園為例證的蘇州園林的興盛

1、拙政園，三國時為郁林太守陸績宅第；東晉為高士戴顓的宅第；唐代為詩人陸龜蒙的宅第；宋代時山陰簿胡稷言在此建“五柳堂”；元代，這裏為大弘寺。明弘治年間進士王獻臣，以禦史之職巡視山西大同時，遭人誣陷後解職回蘇州，於正德四年（西元1509年）在大弘寺的基礎上築拙政園。

2、留園

明嘉靖年間，為太僕寺少卿徐泰時建。徐泰時曾任工部營繕主事、工部營繕郎中。主持過修復慈甯宮、建造萬曆皇帝壽宮（定陵），因得罪權貴，被彈劾回蘇州。清嘉慶初，園歸東山人劉恕。劉恕曾任職廣西右江兵備道，未滿 40 歲就稱病告老還鄉。購得徐氏園後即重新整修並進行了擴建，改名為“寒碧山莊”。清光緒二年（西元 1876 年），園歸湖北布政使盛康。盛氏對園又進行了擴建。因前園主姓“劉”，且曆兵燹，閭門外惟留此一園，故盛氏諧“劉園”之音而改名“留園”。

3、網師園

網師園前身為一座宋園。南宋淳熙初年，紹興進士、官樞密院編修的江都（今揚州）人史正志歸老蘇州，於此建“萬卷堂”，並為花園取名為“漁隱”，以此喻隱逸之意。史正志後，園漸廢，自宋末至清乾隆間的五百年中無此園的歷史記載。據清錢大昕《網師園記》清乾隆年間，光祿寺少卿宋宗元在宋史氏萬卷堂故址“治別業為歸老之計，因此網師自號，並顏其園，蓋托於漁隱之義。”乾隆四十四年（西元 1779 年），園歸瞿遠村。同治初年，園歸江蘇按察使李鴻裔。李系四川中江人，因網師園與蘇舜欽滄浪亭相去不遠；又因其出生地四川眉山與蘇軾舊居比鄰，曾自號“蘇鄰”，故更園名為“蘇鄰小築”。民國六年（西元 1917 年），以三十萬兩銀子購得此園的張作霖，以之贈湖北將軍張錫鑾，易名“逸園”。張錫鑾逝世後，其子張師黃繼為園主。1932 年淞滬抗戰爆發，葉恭綽、張善孖和張大千兄弟借寓園中，殿春簃即為張氏兄弟畫室。1940 年，園為文物收藏家何亞農買下。1950 年，何氏後人將園捐獻給人民政府。

三、世界文化遺產與我們

作為歷史文化名城的蘇州，歷史為我們留下了古典園林和眾多古迹。然而，對世界文化遺產的概念及其認識，蘇州和蘇州人民，經歷了一個不同尋常的過程。上世紀五十年代後期，由於發展經濟的迫切願望，我們曾感慨蘇州的“煙囪沒有寶塔多，工廠沒有廟宇多”的狀況，於是在經濟的發展中，曾多處發生“一廠毀數園”（即辦一個廠而折毀多處私家小園林）的情況。同時，由於觀念、認識等原因，蘇州的古城牆被拆除。僅留下了盤門等為數不多的古城門。其後，又歷經了眾所周知的十年“文革”，蘇州的傳統文化及其遺存，受到了相當程度的破壞。當整個中國從“文革”的動亂中走出來的時候，蘇州也開始了新的文化思考。

在 1994 年當蘇州開始著手進行蘇州古典園林申報世界文化遺產的工作時，儘管大多數人連世界遺產的概念都搞不清楚，但保護老祖宗留下的文化遺存，還是很容易取得共識。幾經討論，蘇州市決策層形成了一個較為成熟的意見，把焦點集中在最有代表性、保護情況好、國際知名度高的古典園林上，從而開始了長達六年的申報過程。申報取得圓滿成功，蘇州 9 個蘇州古典園林都列入了《世界遺產名錄》，代表著蘇州古典園林已作為一個群體登上了世界文化遺產的聖壇。

列入世界遺產名錄後，如何保護、發揮好世界遺產的綜合效能，成為了蘇州人和蘇州城共同面對的一個新課題。顯然，加入了遺產名錄並不意味著高枕無憂、萬事大吉。根據《世界遺產公約》的相關規定，締約國和遺產地應對世界遺產承擔如下多項責任。而為了繼續做好世界遺產地的保護、管理和研究、宣傳等工作，1997 年以來，蘇州市創新思維積極探索，走出了一條世界遺產保護與持續發展的新路。

（一）建立和完善了相關的法律法規。蘇州市根據國家《文物法》、《環境保護法》、《風景名勝區管理條例》等法律法規，結合蘇州園林保護工作的實際情況，經江蘇省人大常委會審議批准，

頒佈實施了我國第一部園林保護和管理的不地方性法規《蘇州園林保護管理條例》。此外陸續頒佈實施的還有《蘇州城市綠化條例》、《蘇州市古樹名木保護管理條例》、《蘇州市古建築保護條例》等，這些條例法規對古典園林的保護提供了有力的法律保障。

- (二) 按照相關的法律法規，進一步加強已列入《世界遺產名錄》的9座園林的保護管理，進一步加快古典園林修復步伐，對園林文化進行了深入的挖掘性保護。
- (三) 以已進入世界遺產的古典園林為中心，全面鋪開對所有歷史名園的修復性保護。
- (四) 在建設中加強外部環境整治和保護。
- (五) 進一步加大宣傳工作力度，在全市範圍內深入持久地宣傳世界遺產，做到家喻戶曉，提高了廣大市民的遺產意識和保護意識。

传统文化保护与旅游开发——以江南水乡古镇为例

中国苏州科技学院教授 陈来生

中国有着悠久而丰富的传统文化遗产，但同时也都面临着保护与开发的两难境地。

以数量众多、形态各异的历史文化名城、古镇为例，如何保护？是消极堵塞还是积极引导，是当作一成不变的古董供奉起来还是在动态发展的过程中寻求可持续发展的出路？

下面就以江南水乡古镇的保护和开发为例，谈谈传统文化的保护与开发。

一、江南水乡古镇的研究意义

古镇具有各地历史传统和文化特色的古民居、古街区、古建筑等历史古迹，既是历史的积淀，也是活着的历史，更是人文旅游资源的荟萃之地。

中国现存的传统村镇数量众多，江南水乡城镇凭籍其悠久的历史 and 独特的水乡风貌独领风骚。所以江南水乡古镇具有特别重要的保护和开发意义。

再从传统文化遗产研究和保护方面所呈现的趋势看，研究水乡古镇也有着以点见面的特有意义。

二、古镇旅游的必然性和合理性

文化遗产保护的一个基本原则是有序合理利用。没有保护的开发，是不可持续的开发；而没有开发的保护，则是没有根基的保护，不可能成为有效的保护。合理的开发利用，有助于文化遗产保护在资金保障机制方面进入良性轨道。同时，有效的开发利用，在本质上也积极发挥了遗产本身作为文化载体必须承载文化传播的社会功能。

在目前，把遗产地同时作为文物旅游景区进行开发，是包括中国在内的世界范围内文化遗产开发利用的一种普遍形式。开发利用并不是问题，关键是如何科学有效地开发。

江南古镇作为无法替代的珍贵遗产，固然应该保护其特有风貌和传统文化，但江南古镇也要发展社会经济。要寻求既能保护古镇又能寻求自身发展的产业，旅游乃成首选：它所具有的其他优势暂且不说，仅从旅游业既要保护名城古镇风貌以维护旅游资源，又要建设现代化设施以满足游客需求的双重性来说，它也是江南古镇保护与开发的最佳契合点。

中国旅游业发展事实证明，遗产资源的市场化开发是经济发展环境代价最小的一种现实选择。在当代这种多元的契约性社会，对文化遗产这种公共性的资源，必须在保护、旅游和发展中寻求一种平衡，从而使保护与利用走一条可持续发展的道路。

三、江南水乡古镇旅游开发存在的问题

古镇旅游在为当地经济注入新的发展活力的同时，有些地方由于没有充分认识到古建筑、传统街区的历史文化价值，致使不少建筑遗产被拆毁；或者只片面追求经济效益，将遗产保护与旅游开发本末倒置，对文化遗产带来严重损害。

（一）“空心化”导致古镇韵味的缺失

(二) 社区参与度不高，居民的保护意识薄弱

(三) 忽视生态环境和文化环境，污染严重

(四) 商业化倾向太浓，旅游商品加工粗糙

四、江南水乡古镇的旅游开发与保护

(一) 古镇保护和旅游开发的原则

1、保护性开发原则

2、协调发展原则

古镇的开发必须兼顾社会、经济、环境三方面效益，经营必须统筹经营者、旅游者、居民的三方利益。要在保护性开发的前提下，使遗产旅游能真正可持续发展。

(二) 整体环境的维护

古镇整体环境是文化保护和旅游开发的基础。古镇旅游要长远发展，开发时就必须注重整体环境的维护，这在客观上保护了历史文化古镇。

1、建立整体人文生态系统保护体系

2、控制人流，保护环境，营造适宜的旅游环境

3、古镇实现部分空心化，保护古镇，发展新区

(三) 建立有效管理机制，推行生态旅游行为标准

一是制定古镇环境保护管理条例，二是提高管理水平，三是推行符合生态标准的行为体系（不仅包括旅游者的行为标准，旅游管理者的行为标准，同时还包括旅游设施的建设标准等，旨在将旅游行为对古镇景观的人为破坏降低到最小的可能性，从而有效保护传统文化）。

(四) 挖掘并打造具有独特文化内涵的品牌

江南水乡古镇深厚的根基是其历史文化底蕴，因此在开发保护中其核心定位是“文化”，其次是“古镇”，再次是“水乡”。

(五) 建立合理的社区参与机制，形成保护传统文化的氛围

(六) 提高综合经营能力，有效保护文化遗产

“역사 도시 경주의 문화재보존 성과와 문제점 그리고 사라지는 근대유산”

(財) 新羅文化遺産調査團專任研究員 金鎬詳

소개받은 김호상입니다. 오늘 아침 호텔식사에 ‘낫토’를 먹었습니다. 예전에 ‘낫토’와 ‘콘부차’를 처음 접했을 때, 저에게는 맛있는 음식이 아니었습니다. 그렇지만 한두 번 다시 접할 때마다 일본의 전통 깊은 음식이라는 점에서 매력을 느끼고 예전에 처음 맛보았던 때를 회상하며 맛있게 먹었습니다.

오늘 일·중·한 심포지움에서 발표된 모든 것을 다 이해할 수는 없지만, 3국이 협력한다면 고대 찬란했던 동아시아 문화를 재현할 수 있을 것이라고 생각합니다. 부족하고 잘 정리되지 않은 자료지만 통역하시는 성미나선생님께서 잘 정리해 주시리라 생각합니다. 간략하게 역사도시 경주의 문화재보존 성과와 문제점을 살펴본 후 급격하게 소멸되어가는 한국 농촌의 생산유적을 소개하고자 합니다.

경주는 한국의 대표적인 역사도시입니다.(사진 1) 신라는 경주를 중심으로 기원전 57년에서 기원후 935년까지 992년이라는, 로마제국을 제외하고는 찾아 볼 수 없는 긴 역사를 가진 나라였습니다. 이러한 유구한 역사를 가진 신라를 통치한 석씨, 박씨, 김씨라는 3개의 집단에서 56명의 왕이 배출되었고 이 중 3명은 여왕이었습니다.

신라의 수도인 경주의 도시구조는 중국의 당나라 장안성을 모델로, 일본의 나라와 같이 바둑판 모양의 360개 방(坊)을 가진 격자형이었으며 발굴조사에서 확인한 바, 1개의 방은 약 160m x 160m 크기의 규모였습니다.(사진 2, 3) 전성기인 8세기에서 9세기에는 도시의 모든 백성들이 숯으로 밥을 지었으며 가옥을 금(金)으로 장식하는 것에 대해 금지령을 내릴 정도로 부유하고 화려한 도시였습니다.

고대 동아시아의 대표도시인 경주에 산재해 있는 문화재 보존 성과와 그 문제점을 살펴 보고자 합니다.

I. 역사도시 경주 문화재 보존의 성과와 문제점

1. 문화재보존의 대표적인 성과 사례

- 1) 경주 지역에 들어설 경주 경마장 예정부지 약 30만평에서 대규모 기와·토기가마를 비롯하여 선사시대에서 근대에 이르는 다양한 유적이 확인되자, 전국민들의 경주 경마장건설 반대로 인하여 사적 제 430호로 지정되어 보존이 이루어지고 있습니다.(사진 4)
- 2) 경주 도심을 가로지르는 기존 철도 노선을 이용하여 경부고속철도(KTX) 건설이 계획되었습니다. 그러나 경주시민을 비롯한 문화재기관에서는 왕경지구 및 문화재 보존을 위해 철도 노선을 경주시 외곽지로 변경하였으며 신라왕경 핵심지구에 설치되었던 현재의 도심 또한 외곽지의 신도시로 이전하게 되면 왕경 복원이 좀 더 쉽게 이루어 질 것으로 판단됩니다.(사진 5)
- 3) 근년에는 역사도시 보존법이 입안되면서 경주도심내의 대규모 고분군들 사이에 있던 민가

들이 이전되면서 고분들의 원형을 찾을 수 있었습니다. 이 고분군들은 고고학적인 조사결과에 의하면, A.D350~550년 약 200년간 경주지역에서만 확인되는 적석목곽묘의 구조를 갖추고 있었으며 금은(金銀) 등의 출토유물들이 쏟아져 신라가 “황금의 나라”라고 불려지게 되었습니다. 이들 고분의 원형 복원이 이루어진다면 신라인들의 삶과 죽음 그리고 내세관을 엿볼 수 있는 야외 전시관의 역할을 하게 되어 문화재 보존의 성과를 거둘 수 있게 될 것입니다.(사진 6)

2. 문화재 보존의 문제점

- 1) 경주에는 원자력 발전소가 있으며 근년에는 새롭게 방사성폐기물처리장이 건설되고 있습니다. 방사성폐기물처리장이 건설되는 지역에는 생활에 필요한 많은 지원시설이 들어서기 때문에 경주 시민들에 의해 유치되었습니다. 그러나 현재로서는 방사성폐기물처리장과 원자력발전소에서 사고가 일어날 경우에 대비한 문화재 피해 대책이 마련되어 있지 않을 뿐만 아니라 역사도시 이미지 훼손이 예상되고 있습니다.
- 2) 또한 한국에서는 10여년 전부터 지방자치제도가 실시되면서 시장 및 단체장들은 시민들과 지역민들에 의하여 선출되기 때문에 문화재보호법에 대한 규제의 해제 및 개발 압력에 대해 자유롭지 못합니다. 이러한 이유로 유적이 급격하게 훼손되고 있으며 문화재 경관 등의 왜곡도 나날이 심각해 지고 있습니다. 이러한 것들을 조금이라도 완화 시키기 위해 국가에서는 역사 도시의 시장과 단체장은 문화재 전문가를 임명하는 것도 바람직하다고 생각합니다.

경주의 많은 문화재는 경주시민과 대한민국 국민만이 보존·보호하고 또한 그 혜택을 누려야 할 것이 아니라 동아시아 더 나아가 세계인들이 관심을 갖고 보존·보호해 준다면, 유네스코 헌장의 이념처럼 전 인류에게 그 혜택이 돌아갈 것으로 생각합니다.

다음으로는 한국사회에서 급격하게 사라져가는 근대 문화유산에 대해 간략하게 언급하고자 합니다.

II . 급격하게 사라지는 근대문화유산

야나기 무네요시의 공예론에 의하면, 산업기술의 발달로 질 좋은 제품이 대량으로 생산되어 값싸게 보급되면서 누구나 사용할 수 있어 문화의 평등성을 갖게 되었다고 합니다. 기존의 수공업시대에는 제작자가 도구를 이용하여 제품을 만드는 주체였으나 산업화 사회에서는 기계가 주체가 되고 사람이 기계의 부속으로 바뀌게 되는 모순을 말한 바 있습니다. 산업기술과 과학기술이 하루가 다르게 급변하는 한국사회에서 무엇보다도 급격히 변화하고 있는 부분은 농어촌의 생산유적이라고 할 수 있습니다.

1. 목탄요 (사진 7, 8, 9, 10)

2차 세계대전이 일어나기 이전, 전세계의 에너지는 대부분이 목탄에 의지했습니다. 그러나 현대에 있어서 숲은 전기, 오일, 원자력 등과 같은 대체에너지의 발달로 점차 그 사용이 사라지고 있습니다. 특히 한국에서의 목탄가마는 본래의 목적인 목탄의 생산이 아니라 찜질방의 역할로 바뀌어져 가고 있습니다. 이는 전통적인 문화의 변질이라고 할 수 있습니다.

2. 삼베가마 (사진 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18)

수 천년 동안 인간의 몸을 보호해 준 대표적인 직물중의 하나가 삼베입니다. 삼베에 대한 재배와 수확 그리고 완성되기까지는 많은 노동력이 필요하지만 그 노동력에 비해 금전적인 가치가 터무니 없이 낮게 책정되어 사라지고 있습니다.

긴 세월 동안 우리의 몸을 보호해주던 삼베가 50년도 채 되지 않아 대체 섬유 개발로 사라져 가고 있습니다. 지금이라도 이러한 자료를 철저하게 기록하고 보존하지 않는다면 우리 후손들은 근대의 문화유산조차도 박물관에서 공부를 해야 할 것이며 민족의 고유한 정체성을 잃어버릴지도 모르는 일입니다.

3. 손곡동·물천리유적 (사진 19, 20, 21, 22, 23, 24)

현재의 대부분 토기와 기와는 대규모 공장에서 생산이 이루어지고 있으며 예전의 수공업으로 생산하는 예 등은 거의 사라져 가고 있습니다. 제가 1994년 동국대학교 경주캠퍼스 박물관에서 조교로 있을 당시, 스타시립박물관의 후지와라 마나부선생님께서 경주로 기와가마를 조사하러 오셨을 때 손곡동·물천리유적을 안내했었습니다.

그때까지만 하더라도 경주의 여러 곳에는 많은 재래식 가마가 있어서 그 중요성을 인식하지 못했습니다. 그러나 몇 년 후 그 많던 기와가마는 흔적도 없이 사라져 버려 그 당시의 기와가마 흔적은 스타시립박물관 전시실에서만이 볼 수 있으며 그에 대한 기록 또한 한국에는 전혀 남아 있지 않아 안타까울 따름입니다. 저는 그것을 계기로 모든 유적은 그 당시에는 중요하지 않을지 몰라도 언젠가는 매우 중요한 문화유산이 된다는 것을 뼈저리게 느끼게 되었습니다.

III . 맺음말

저는 2년 전에 작고하신 이마무라 쇼헤이 감독이 만든 “나라야마 부사코”를 보면서 일본, 중국, 한국은 자연환경과 풍토에 따른 풍속과 습속은 달라도 부모님에 대한 효도는 동일하다는 것을 느꼈습니다. 오늘 일·중·한 국제심포지움의 발표 주제는 다르지만, 우리 삶의 소중함을 일깨워주는 문화유산의 진정한 가치는 모두 같은 것 같습니다. 오늘 제가 여러 선생님들께 배운 내용을 귀국 후 행정예 직접 반영되도록 노력할 것입니다.

좋은 공부를 할 수 있는 기회를 주신 관서대학교 문화유산실 다카하시 선생이하 여러 선생님들께 감사드립니다.

- 부 록 -

- 사진 1. 경주 항공사진 (慶州 航空寫眞)
- 사진 2. 경주 왕경유적 (新羅 王京遺蹟)
- 사진 3. 경주 왕경유적 (新羅 王京遺蹟)
- 사진 4. 경주 경마장부지 (慶州 競馬場敷地)
- 사진 5. 경주 고분군 정비지구 (慶州 古墳群 整備地區)
- 사진 6. 경주 신라고분 (慶州 新羅古墳)
- 사진 7. 숯가마 (木炭窯)
- 사진 8. 숯가마 작업전경 (木炭窯 作業全景)
- 사진 9. 숯가마 작업전경 (木炭窯 作業全景)
- 사진 10. 숯가마 찜질방 (木炭窯 蒸熟休憩室)
- 사진 11. 삼 수확전경 (麻 收穫全景)
- 사진 12. 삼 수확전경 (麻 收穫全景)
- 사진 13. 삼 수확전경 (麻 收穫全景)
- 사진 14. 삼 증숙전경 (麻 蒸熟全景)
- 사진 15. 삼 증숙전경 (麻 蒸熟全景)
- 사진 16. 삼 건조전경 (麻 乾造全景)
- 사진 17. 삼 표피제거 전상태 (麻皮除去 前狀態)
- 사진 18. 삼 표피제거 상태 (麻皮除去 狀態)
- 사진 19. 경주 경마장예정부지 (慶州 競馬場豫定敷地)
- 사진 20. 경주 경마장예정부지 토기가마 (慶州 競馬場豫定敷地 土器窯)
- 사진 21. 근대기와가마 (近代瓦窯)
- 사진 22. 근대기와가마 (近代瓦窯)
- 사진 23. 근대기와가마 부속가옥 (近代瓦窯 附屬家屋)
- 사진 24. 근대기와가마 (近代瓦窯)

관광으로 본 한국의 문화유산

한국 문화유산 관광 코디네이터 金美貞

안녕하세요. 저는 한국부산(釜山)에서 관광 가이드로 일하고 있는 김미정(金美貞)이라고 합니다. 주된 관광지인 부산, 경주(慶州)에 대해 또 관광지를 안내하며 느낀 점에 대해서 이야기하려고 합니다.

부산 금정산 범어사 (金井山 梵魚寺)

부산은 인구 380 만의 한국 제 2의 도시로 세계 제 5위의 무역항이자 상업 도시입니다. 그 시내에 신라시대 문무왕 18년(678년) 창건된 범어사가 있습니다. 범천에서 금색의 고기가 내려와 금빛으로 빛나는 우물에서 놀았다는 설화에서 유래된 곳입니다. 특히 대학 입시 철에는 합격을 기원하는 어머니들이 많이 모이는 곳입니다.

경주 (慶州)

경주는 BC57년 박혁거세가 신라를 세우고 왕이 되어 AD935년 멸망할 때 까지 약 천년간 지속된 왕조의 도읍지로 1995년에 석굴암 불국사가 2000년에 경주 역사 유적 지구(남산지구, 월성지구, 대릉원지구, 황룡사지구, 산성지구)가 세계유산으로 등록되었습니다.

1 토함산 석굴암 (吐含山 石窟庵) 국보 제 24 호

토함산(海拔 745m) 석굴암(AD751년)은 김대성에 의해 건축된 전방 후원의 인공 석실 돔 형식의 절로써 원형의 석실 안에는 약 350센티의 화강암 본존 좌상이 동해를 바라보고 있습니다. 그벽에는 사천왕상, 금강역사, 11면 관음보살상, 10대제자, 인왕상등 39체의 돌을세김한 마애불이 본존을 둘러싸고 있습니다. 년 1회 석가탄신일에는 일반 관광객의 실내 관람이 가능 합니다.

2 불국사 (佛國寺)

AD751년 김대성에 의해 지어진 절로써, 임진왜란 과 몇번의 화재로 소실된 전각을 1973년 대규모 보수공사로 현재 모습의 절이 되었습니다.

다보탑 (국보 20 호) 석가탑 (국보 21 호) 청운 백운교 (국보 23 호)
연화 칠보교 (국보 22 호) 비로자나불 (국보 26 호) 아미타불 (국보 27 호)

의 6개의 국보를 보유하고 있으며, 불국사 사리탑(보물 61 호)은 1906년 동경 정양헌에서 발견되어 1933년 조선총독부에 반환되었습니다.

3 천마총 (天馬塚)

세계유산인 대릉원 지구에 1973년 발굴 조사후 전시실로 조성된 고분으로 5-6세기 조성된 것

으로 추정되는 적석목곽분으로 약 1만 2천점의 부장품이 출토되었습니다.

4 경주 국립 박물관

1975년 개관, 선사 시대부터 신라 시대에 이르기까지의 유물이 야외 전시실을 포함한 4개의 전시실에서 국보 17점을 비롯한 약 8만 점을 소장 전시하고 있습니다. 일본인 관광객을 안내하면 부산 용두산공원의 이순신 장군이나, 정발장군, 자성대, 경주의 불국사등 임진왜란이나 식민지 시대 등에 대해 이야기할 때가 많습니다만, 그때 여러가지 손님의 반응을 볼 수 있습니다. 버럭 화내는 분이러든가, 정말 죄송합니다라며 머리까지 숙이고 사과하는 분, 아무 반응도 보이지 않는 분, 저로서도 어떻게 대응해야 할지 생각하게 할 때가 많습니다. 이러한 경우 어떻게 대처해야 할지 고민하게 됩니다. 그러나 생각해 보면 일본도 한국도 역사에 접근하는 생각이 이대로 괜찮은지 하고 생각하였습니다. 개인 개인의 교류가 계속 늘어나는 시대이기 때문에 더욱 더 쿨한 의식을 가지고 서로를 있는 그대로 받아들일 수 있을 때 한일 관계의 진정한 프렌드 쉽을 가질 수 있을 거라고 생각합니다.

이상입니다.

国際シンポジウム 人びとの暮らしと文化遺産—中国・韓国・日本の対話—

☆日本における事例

重要文化的景観選定第1号「近江八幡の水郷」

近江八幡市文化政策部文化振興課専門員 奈良俊哉

1. 近江八幡の景観保護

- 昭和40年代の高度経済成長期に八幡山城の掘割である「八幡堀」が水質の悪化や泥土の堆積によって公害源となる。
- 青年会議所を中心としたニューリーダー達による掘割再生運動始まる
誰のための再生か？ なぜ再生するのか？ 狭い町に公園と駐車場を
- 観光目的でない・ノスタルジーでない=アイデンティティーの確立
- 八幡堀という身近な風景を意識する。
- 市民の共感＝静かな町並み・住み良い環境・地域のコミュニケーションを維持すること
- 八幡堀再生運動の成功＝近隣の景観形成にも波及
景観協定地区15地区（県内で1番多い）
景観法による景観計画区域の決定第1号
景観法による景観農業振興地域整備計画決定第1号

八幡堀の再生運動により自信をもった市民が、積極的に参加している。

町づくりとしての風景づくり VS 観光を目的とした景観づくり

持続可能なまちづくり・景観づくり

一時的な景観づくり

重要文化的景観「近江八幡の水郷」の構成要素

1. 八幡山の北東に水郷地帯広がる

琵琶湖最大の内湖 「大中の湖」

中世末ごろ（15世紀）ヨシ問屋円山・白王からヨシを供給していた

以来ヨシ問屋は今でもこの地域に4軒ある

江戸時代	船運を利用し琵琶湖の湖上交通の要衝となる＝「諸浦の親郷」
	八幡堀＋北之庄沢＋大中の湖 北側からのアプローチ
	八幡堀＋船木浦＋津田内湖 南側からのアプローチ
江戸時代後期	船運を利用した瓦産業の勃興＝八幡堀の両側に瓦屋がたくさんできる
	水郷地帯に広がる水田の下土を瓦の材料粘土として利用

文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業
オープン・リサーチ・センター整備事業（平成 17 年度～平成 21 年度）
なにわ・大阪文化遺産の総合人文学的研究

国際シンポジウム報告書

人びとの暮らしと文化遺産

- 中国・韓国・日本の対話 -

編集 森本 幾子（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター 主任研究員）
千葉 太朗（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター リサーチアシスタント）

発行日 2008 年 11 月 30 日

発行所 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

〒 564-8680

大阪府吹田市山手町 3-3-35 関西大学博物館内

電話 06-6368-0095